

たり。學究先生の知る所にあらずと號して四たび難詰を遁れたり、言説にあらずして人にありと稱して五たび難詰を遁れたり。己れを解せざるものと語るを欲せずと唱へて六たび難詰を遁れたり。何ぞそれ遁るゝの術に巧みなるや。

そもく顔を抗げて人と辯すること能はず。追ふものあれば直ちに暗所に遁れて之れを漫罵し餘暇あれば同臭の人と三昧に似たるの言を弄し誇耀して以て己れを高うせんぞす。醜と謂つべき也。説者が世間の己れと臭味を異にするものを罵るや、學究先生といひ、道學先生といひ、部門的學究といひ、何といひ何といふ、到らざるなし。而して文壇の作法を説くものは彼れなり。而して體達てし人生の悟道に入れるものは彼れなり。而して一代を教へ、一代に豫言せんとするものは彼れなり。はたまた心あるものが午餐の用意をもす

る頃に夜明けたりと大聲疾呼して起き出づるものは彼れなり。パ
イブルを讀めばパイブルの口眞似し、平家を讀めば平家の口眞似し、
ニイチエを讀めばニイチエの口眞似し、日蓮を讀めば日蓮の口眞似
するものは彼れなり。日本國小なりといへども、之れを以て一世の
豫言者とせんには、餘りに恰憫ならずや、餘りに矮小ならずや、また餘
りに滑稽ならずや。

さて以上論はやゝ體を失へりといへども、嘲罵の外を知らざるもの
は、我れまた誅するに嘲罵を以てすべし。斯くの如きの徒をして一
日其の驕慢を強うせしむるは、一日少年をして學業を疎んじ獸欲を
逞しうするの端を得しむるものに候。我等の見地より申すとき、斯
くの如きは人道の賊なり。此の逼促の言を成すに異議なしと存候。
匆々。

尙ほ思ふに前文は日本の欲性論者を難する方が主になつたれど、ニイチエ其のものに對して吾人が好意を表すれば、唯其の詩人といふことだ。哲學者として、豫言者として、批評家としてといふやうな當代批評家の鼠負觀は、吾人に何程の感をも興へぬ。何とならば、一たび智識の光りによりて之れを見るときは、到底健全のものといはれぬが故である。而も彼れが書を読めば、面白い、人生半面の事實が詩の特色によつて誇張的に發展し、以て吾人の情に觸れて来る。されども此の瞬間の我が心ざまは、審美的である。世に若し象を用ふること少なく、理を其のまゝに用ふること多くして、而かも美術的製作たるを得るの方法ありとすれば、即ち是れである。今の欲性論者の一人が、先年抽象美といふことを論じたことがある。若しあれを抽象理が或る場合に於いては、裸體のまゝ

審美的効果を得ることの趣意とすれば、即ちニイチエの場合なのだ。随つて此の場合の抽象理の必然の要件として、理の明白即ち論理的徹底を缺いて居なくてはならぬ。漠然たるものでなければならぬ。何とならば、抽象理の美となる事情は、其が不定着なる人生雑多の事象と漫然連結する所に存すればである。即ち此の場合にも、實は理が理として美なるではなく、其の理の下に潜んでゐる無數類似の事象が、其の理の實例として採用せられんと競争的に浮び來たる所に美が生ずるのだ。之れを抽象美といふのは、悪くはないが、今の論者は悟りを開いて豹變して以來、勿論こんなことは忘れてゐるであらう。

それでツアラーストラの場合などが最もよい例だ。また最も其の體を得たものである。何となれば、其の言説が凡て人間なら

ぬ人間を相手にし、また其の修辭が凡て譬喩的に、皮肉な所に一分の滑稽もまじつて、此の種の美文たる資格を具へてゐるからである。日本でいつたら寧ろ青柳君などの筆脈から這入るべきだ。讀んで面白く何か甚深の眞理がちらついてゐるやうで其れで再讀して靜に考へると不條理、寧ろ不可能といふと分かる。即ち初めの場合は審美の力に打たれてゐるのだ。理想派の美學でいつたら假象の世界に這入つてゐるのだ。それで靜に再考する時は審美の世界を出て道德の世界に來るのだ。石川や濱の眞砂は盡ることも世に盗人の種は絶えまじといふ歌が芝居學問の人の耳に一種の感想を鼓吹したなごも同じ理だ。されば吾人が取る所のニイチエから言へば宜しく人々書齋の中で黙讀してほゞ笑むべきものであり假りの世界に這入つて樂むべきものである。ま

た若し其の美感から殘留した實の印銘があるとすれば、其れは何所までも實の印銘として取り扱はねばならぬ。美のために誇張せられた感情を離れての勘考にしなくてはならぬ。即ち公平なる知識の鑑識に待つべきものだ。審美の世界と道德の世界とは截然として之れを區別し得るのが我等の性格のプライドでなくてはならぬ。世の感情を説き信仰を説きロマンチックを説くものが勵むもすれば感情の内容に知識あり理性あるべきを忘れて美に酔ふの心を直ちに實にせんとするのは吾人の興せぬ所である。將たまた美に酔へる感情興奮の態度を以て事に足るの要ある場合には、其の感情が必ず知識と乖背せざるの保證を有するものでなくてはならぬ。何とならば此の保證なきものは軌道を逸せる奔車の如く進んで自ら覆滅するを免れぬものであるから。

然るに日本のニイチエは

三五〇

に拘らず、哲學たり主義たり道徳たる方面のニイチエを眞正面に生まじめに其のまだ感じ易い天下の青年に實行させやうと煽動してゐる。無方者とは是等の謂である。性格に根據あるものが儘に把翫して可なるべきものを、公衆の前に直ちに行ひ得るまでに曳き下して、説法の材料に供してゐる。現實の世界に行ふべからざるものを行はせんとしてゐる。吾人が彼等に對する批難の中心はこゝにあるのだ。斯やうにして彼等は放蕩無賴を眞理とし、強慾非道を理想とするの結果となる。而かも彼等は放蕩といひ強欲といふ名を嘲けつて高く標置せんとしてゐる。譬へばモルヒネも藥だといつて分量知らずに吞ませる輩であらう、アルコールも酒だといつて其のまゝあほらせやうとしてゐる徒だ。そ

れで毒とは人間が付けた名だフ、ンなぞと非人間的なことを言つて澄ましてゐる連中だ。天下にニイチエを會したるものは己れ一人なるが如く大言して、其の實己れがまづ分量違ひをして、毒にあてられて喉ぐものは彼等だ。固陋の見とは是等をいふ書を読んで書を解するの道を知らぬとは是等を云ふ。狂人に剃刀とは是等をいふのだ。凡そ斯くの如きの徒に對しては、彼等をして先づみづから其の主義の効果する所を實驗せしむるの外は無い。即ち敢て吾人が其の實踐を迫る所以である。

ニイチエの哲學としては、其の肉體の外に心なきを説く所に拾ふべき眞理あれども、是れ豈ニイチエを待つべき思想であらうや。彼れの要求する地位もまた是れにあらずして、實は肉體の外といふと共に肉體内の必然の現象としても之れを排却する所にある。

右に廻るが本能の時計のせんまいにですら、左から来る制車の齒が必要なる事實を、ニイチエは無視する所に立つてゐる。ゲーツキンの弱肉強食主義のと言つても之ればかりを道徳主義の上に發展させた結果は、所詮極致ばかりを一足飛びに見て、時間の團の中に徐歩してゐる人生の現事實を忘れた非進化論たるを免れぬ。山は眞直に麓から頂上へが一番近いといふけれども、垂線的に見あげた山の頂邊へ、一足飛びに駆け上がらうとする馬鹿者があつたらざうであらう。

今一つニイチエに人を引く所があるといへば、其れは彼れの人物性格と其の主張との關係だ。如何にも蛇や鷲を友達にでもじさうな顔色の中に、正直一徹な所もあるやうで、持つて生まれた皮肉もありさうな、此所等を其所説に比べて見れば、此にも審美上の元

素はある。且つ彼れの警句はオリジナルだ。それで恐らく誠實でもあつたらう。日本のニイチエなどのやうに假座を使つたり、悟つて豹變したりするものには無い。全體日本のニイチエは餘りに利巧ではないか。幾多の單純な讀者があんなものに嚇かされるのは、畢竟これも讀書が足りないからだ。前に本家を見て置けば、假座の出た時に吹き出す位で済むのだ。此の後こんな議論が續くやうなら、量見の据らぬ人は、議論に耳を假す前に先づ原書を見るがよい。今は上野の圖書館にもあらう。丸善にも來て居やう。早稲田の圖書館にもある筈だ。獨逸の讀めない人は、英譯でも澤山だ。誰れか此の前英譯で讀むやうではなぞと、大きな事を言つてるものがあつたかと記憶するが、あれは皆世間の不誠實な徒が、人を凌がんに爲に駄法螺を吹くのだ。何で今の若い讀書

子が五年や七年日本で獨逸語を習つたからといつて、それで英譯と獨文との間に生ずる文味の相違など仔細に嚙み分けることが出來やう。幾らか手取り早い英譯の方を内々讀みながら、クオテ・イン・シヨンの人に見せる時だけ原書にするといふ手合が多いのだ。こんな人々のいふことに耳をかす必要は無い。それは原書に如くはなからうが、英譯でも今出て居るものは評判のいゝ譯書集の三巻まで出てゐる。何でもお互ひにも少しごつしりした人間になつて、フハフハ吹けば飛ぶやうな文壇の風氣を一新したいものだ。

(明治三十五年十月十八日稿)

(明治三十九年五月追記)此の文が専ら論難の的とせし個人格は故高山樗牛君なりしこと、當時帝國文學に於いて登張竹風君の指摘せしに違はず。而も予が此の文を草してより期月當の論敵樗牛

君は予の文を見るに及ばずして病を以て逝けり。大澤に長蛇を逸するの憾みは予に於いて無きに非ざりしも、身世蹉跎の感覺えず予をして惘然たらしめき。夫れ紫の朱を奪ふものを惡むは此の文の動機なり。されども生きたる人を撃つと死せる人の思想を破するとは態度おのづから別ならざるを得ず。故人を評するは理情の并び到るに如くは無し。現人を撃たんとせば、撃つて必ず胸に最後の一刀を加ふるを要す。此の文は實に現人を撃たんとするもの、時處合期せずして論敵の死後に公にせらる。予は之れを思ふ毎に故人に對して一種の悲哀を感ずるなり。黒といひ白と立して相争ふも所詮は差別の五十年のみ。一たびは我れと他と、鹹淡同味の海に溶け去るべきなり。噫。

偶感

七月八日國にあらば露の朝顔院の風やいかなど。書中にして想を東方の諸君子に致す。倫敦はいま葦の都芝居の都繪畫音樂の都なり。世界の西より南より此の大都の塵と煙とを浴びんが爲に集ひ來るもの日に萬人と稱す。豈また盛ならずや。されば擾々の物一念の風に從ひて煙の如く揚り塵の如く混す。それ天に快樂の星あり地に快樂の泉あり。人間俯仰の際一念の眼子毎に是れを視る。是れを視て憐々として往き且つ復るものは人の世か。手して掬べば甘泉おのづから掌にあり天上の星華偏へに此の時に會すべし。我等はたど靜かに此の理を思はんことを要す。

我等もど生まれて地上の物たり。其の思ふや境の俗たるを仙たるを問はず理と事と等しく可要は味つて其の情趣に達するにあり。涙こぼるゝまでに深く思ふにあり。此義を示すものは文藝なり。想ふに一切の人生は割つて二つとすべし。道德其の一例にして他の一例は文藝なり。道德は勤勞を意味し文藝は快樂を意味す。人生は只この二途のみ。二途といふ。然れども造物のもの豈二つあらんや。之れを分かつものは一心の觀方なり。我れ若し勤勞の窓より望むときは山河星辰有情と非情と悉く道德の意義を帶し來たらすんばあらず。萬法何ゆゑに致々として流轉し行くか。鳥の歌ひ獸の奔るなほ且つ致々の姿あるは何ぞ。そもく我等が心を勞して如是の考察に耽る所以のものは何の意ぞ。總べて是れ道德也。斯くの如くして小は

衣食住の事より大は政法學術宗教の遠きに及ぶまで之れを勤勞と見るときは、すべて道徳の範圍を出でず。文藝も亦た此の窓の前に

は道徳の衣冠を着す。然れども心眼の旋轉は一瞬なり、一たび情趣の門に兜り、快樂の窓を開くときは、是等のもの、忽然として其の姿を變ず。山川禽獸はいふを須たす。衣食、政法、すべて一面の文藝也。科學、哲學も文藝なり。宗教も文藝の科に過ぎず。道徳も其まゝにして文藝の觀を成すべし。天地は展べたる一大文藝のみ。

私におもへらく、造物の義も二つ無し。人生の至極はそれ文藝にあるか。然れども人は時間と差別との囚虜なり。今遂に道徳を滅し、勤勞を滅して文藝の一味にのみ住せんとするは、迷ひにあらずや。迷へりといふまでも無し、斯の如く將欲するの刹那は、やがて勤勞に

非ずや。道徳に非ずや。勤勞絶つべからず、道徳滅すべからざるなり。

かるが故に、達人は常に道徳に住して而かも之れを文藝と見んとす。一念の工風とは此の謂ひにあらずや。安立もこれのみ。宗教もこれのみ。古の達人が、あら面白の世と歌へるは、正に第一勝境に居るの覺悟なり。

我等若し未熟にして、達人の境に居ること能はずんば、暫く現在を以て修業地と觀せんか。少なくとも日に一たび二たびは、其の道徳心を忘れんことを思ふ。神斯くの如くにして、寔に體斯くの如くにして健かなり。之れを第二段境といふ。

然れども、此れと相忘るゝは、彼れと相執するの謂にあらず、偏執あれは、茲に排斥無きを得ず。排斥あるは、是れ勤勞の始めなり。道徳の

始めなり。文藝は一切の物を排せず、一切の物をもしろく味ひありと観するの心に、文藝の詮義あり。されば、強いて文藝の心に参して、精進の縁を作せと説く。文藝の心は、げに自由自在なり、あらゆる思想、學說、主義、道德を情化して、厭はず、あらゆる感情を快樂にして、厭はざるべし。

話頭を轉じて、以爲へらく、西歐の文藝に觸るゝの機多きと共に、却つて想ふは、故國の文藝なり。近世日耳曼の文學を説くものは、更に足利僧院の文學に、許多の回顧を寄するの情に堪えざるべし。伊太利の文藝を説き、自然を説き、バオロ。フランチェスカが夢の如き戀を説くものは、また元祿の櫻の雲に、小袖慕西鶴、近松が心中物語を忘るゝこと能はざるべし。殊に近松は大いなるかな。若し詩的といふの點を以てせば、ダンテが幻想中の一曲、沙翁が傑作の一つを以て之れ

と同架せしむるも、何の異議かあらんや。不幸、東海の端に生まれて、言語懸絶、西歐文華の鼓吹となり、源泉となること、ダンテ沙翁の如くなるを得ざりしは、近松がために憾みとすべし。日本の文藝は、なほ長く彼れに参して、神徠の露に濡ふべきなり。

(明治三十六年七月稿)



風光

新嘉坡より

別來二旬御左右如何例の滞歐文談と銘打ち候もの船中にて直ちに序開きを存じ候へと思ふに任せず讀者に對しては約に背くの罪淺からず貴兄并びに編輯局の御迷惑嘸と存じ申し候次便よりはせめて有りのまゝなる日記中のふしぐをも取りまどめて責を塞がんと心がけ居り候今朝當シンガポールに若赤道を去ること一度何分と申す土地の割には凌ぎよきやうに候公園といはず市街といは

ず人間といはずすべて天地の色彩形式が太陽の猛烈烈光を中心として之れと苦闘し之れに虐げらるゝの標現を有し強く濃く逞しく目もさむるばかりなる一面と傷き疲れ倒れて夢の如く眠れる一面との奇異なる調和を感じ候こと今さらながら初見の眼には新らしう存せられ候人生の意義は苦闘かそもく其の終局は敗殘か遙にかの印度の古美術古思想が由來するところなど思ひやりて今夜は甲板の上に例よりも夜を更かし申し候ソーフーに凭りて海風の微涼を送るに任すれば伏し待ちごろの月橋頭にかゝりて夜は一時をも過ぎ對岸に點々する燈影の赤きのみ我が世さまんの夢をさゝやくとおぼへ候三等に乗り組みし五十人許りの出稼ぎと見ゆる男女當地より上陸致し候ため甲板のあたりは一段の静けさを加へ候月の下に三々五々若き老ひたる男女の打ちむれて興じ更かすさま

色々なる人の身のうへ行く末など聞きては其れも興あることに覺へ居り候ところ今日限りと相成り候小話どもは追つての事この書面認め了り候とき午前二時食堂の電燈下にて寒暖計九十度に有之候諸君へよろしく御傳へ下されたく上海香港と一覽し來たりて未だ航程の半ばにも達せず倫敦に着致し候は五月上旬の豫定に御座候三月二十八日宙外兄の儿右へ抱月生。(明治三十五年三月稿)

海上日記

明治三十五年三月八日 わが横濱を出で立つは今日なり。朝早ければとて三時半といふに夜着より出づ。嗽がんとて椽の戸一枚くればうれしくも晴れたる空に星影はなやかなり新しき水にて身内を拭ひなごすること例の如し。タッセルに含める冷水の體

温と觸れて簇々たる白氣我れを包むの際は神氣旺盛まことに咳唯も詩を成し千巻の經典も聲にしたがひて説くべしとおぼゆ。八時五分前新橋にて人々に別かる。今はなほ行くものゝ悲しき時にあらず。横濱にては汽船問屋に少憩して十時本船に乗り込む。別を齎らせるの諸氏なほ三十人を剩して小蒸汽の通ひ路もいとにぎやかなり。我が乗り組めるは早きかたなりき。後幾杯かの小蒸汽に人の乗り込むたびく我れは却りて甲板の上より人の別れを見る身となれるも可笑し。いざ是れが最後の通ひ船なりと人々を促したつる聲す。惜しき別れもこゝに断つべし。留まるものは征衣の人みな舷に倚りて臨む。梯子づたひに小蒸汽に降りゆく中には年わかき細君の人目つらさが中を今一たびとそと振りかへりて

夫と顔見あはせたる。あゝ我れは斯かること書きて涙無き者と人に譏られやせん。次は頬ゆたかにして半白なれども、さして身分ありとは見えぬ老女の十ばかりなる女兒の泣きくづれたるを、かい抱きて端艇にかへれる。乳母にやあらん。母はこなたの人にて、父なる外人の歸國するに、この兒血に泣く別れすといふなるべし。御身そも何の宿因ありて、斯かる際には生を享けし。長からん生ひさきも哀しいかな、涙多からずば止まざるの命運、そが血に肉に雕られたらすや。これを想へば、満船の別離多しといへども、未だこの薄命の一女兒より、惨なるはあらざるなり。既にして汽笛鳴り、山の如き船體は、一反ばかりも斜めにめぐりて、小蒸汽と別れを惜むこなしさま、あり打ちふるハンケチ、帽子の類、海風になびきて、漸く遠く、白く、小さく消えもて行けば、あゝと

いひて、人々はじめて我れにかへれるが多し。この時正午を過ぐるること半。同乗の新しき友、さては事務の人々など、名のりかはして、懇意を頼むも、斯かる旅路はことさらに頼まるゝ心地するこそ、をかしけれ。

夜は食堂にて二つ三つ雑談ののち、ケビンに歸りて、八時半床に就く。スチームに暖を取りたれば、暑くして汗出づ。

三月九日 細雨午後三時半、神戸港に入る。遠州灘、紀州灘、ともに平穩なりき。

三月十二日 晴朝十時半出帆。こゝにて乗りこめる人多し。

三月十三日 雨朝早く門司に着く。夜甲板に上りて、門司と馬關と、兩岸の燈火、星の如く輝くを見る、とき、却りて情多し。

三月十四日 半晴、七時四十分左に近く六連の燈臺を見、右に遙に長

州の地角を望みて走る。人々本土の見納めなりとて甲板の上より指顧す。この邊海少しく荒る。正午神戸にて合せし時計に三十分餘の差あるを見たり。午後六時甲板に上れば始めて四方陸を見ず渾圓のたゞ中に我が船一つ茫然として弦月橋頭にかゝり星光かすかなり。空の色淺黄にして裾のかた次第に灰がよりゆく。水黒く波浪長大なれども舐め過ぐるが如く靜かにたゞ我が船脚のさへぐを聞くのみ。

三月十五日 朝霧あり。夕かた黃海に入りて海水黄なり。

三月十六日 霧深く船楊子江口にありて進むを得ず。霧中所々に鐘聲を聞く。繋留して晴を待つ船の相替むるなり。我等がこの頃の生活朝餐の卓を撤すれば食堂に留まりて雑談に耽けるもの園基將基トランプの思ひくを戦はすもの講談小説

雑書のとぐひに見入るもの出で甲板に立ちて望むもの舷に倚りて語るもの輪投げ球つきのとぐひより遊歩運動倦めば寝ね時來たれば食ふ。たとへば海水浴などいふものに四五十日を過ごすべき一大合宿所の如し。

三等室にスマトラ島とやらんを志す一群の老幼男女あり。苗字は何れ洋名なるべき一婦人の率ゆる所人々の眉目おのづから淋しきは故郷の風の荒きに堪えかねし身なればなるべし。中に容すぐれし十二三の一女兒あり父なるは世にいふ善人らしく母はありやなじや、よくも知らねど常に父の側にてじやれ居るさま無心と見えぬ。されど早くも主人の眼鏡にやかなひて扱ひのこの兒のみ別格なるは、あはれ如何なる身の行く末となるらん。二等客の三五人こなたに立てるが無遠慮に其を指さして噂しあへる

を彼の兒いかに、か見けん、つと走りて船室に入りしまし、扉を閉ちて出で來ず。人々なほも悪しざまに評し合ふ。されど今の彼の兒罪なし、戸を閉づるとき、振りかへりて人々を見し眼には、必ずや怨みの涙にじみたるべし。あゝ憂きの雑種の女、彼れは或は財貨の中に泣いて一代を送るの人となるべし。此の女は豈煩惱の前に笑諛を講いで身を立つるの愛なからんや。しかも共にこれ差別の世の犠牲なり。あはれならざらんや。

三月十七日 十時頃霧晴る。上海沖にあり。上陸して見物す。舟より望むところ、春河盈々、春帆遙々、砂の色せる沿岸の平地限りなく、楊柳烟るが如し。人家あり、畑青く、桃花點綴して一輪車のその中を走るが見ゆ。
午後急ぎて錨を抜きたれど、霧また至りて進むべからず。夜月痕

朦朧として甲板の上を照す。

三月十八日 濃霧船依然として動かす。例の鐘の音のみ賑はし。人々つぶやくことしきりなれども是非なし。

三月十九日 船出づ霧稍晴れたれど風強し、婦人など船暈の氣あるものあり。

三月二十日 風すさむ夜半月橋頭にかゝりて荒涼の景いふべからず。

三月二十一日 晴暑氣漸く加はる。昨日荷物庫を開きたれば夏着の用意なごす。臺灣の沖も過ぎて無事なり。人々航海の安全を喜ぶ。薄暮汕頭の燈臺を望む。夕陽團々として、真紅の色燃ゆるが如く、橄欖の雲の末灰色に褪せて、黒き水の面と綴ち合はさるゝあたり、切れたる雲のさまぐの形して、赤日の前を馳せかふ景趣

見事なり。三等室に尺八を吹くものあり。旅情を惹くこと多し。
 三月二十三日 曇香港着。上陸。見物。支那人の足ども先を争
 ひて端艇に來たり仕事を求む。人々うるさしとて大喝すると共
 にステッキ傘の類を打ちふりて毆打すれば四十男が泣顔して手
 を合はせ容赦を乞ふ。意氣地なしとも言はゞいふべけれど國民
 としての彼等が立脚地も悲しきものなり、おのづから斯くもなる
 べし。さるにても家には彼れを夫と頼り父と頼るものもあらん
 を其れらを見なば如何に心外にや思はん。我れも未だ野蠻人を
 打ちしことなければ好き折りと背中をこづき試みたりなど誇り
 顔に説くものある我れは與みせず。總じて上海以西數に於いて、
 また恐らく富みに於いて、帶色人種は未だ白色人種に劣らすとい
 へども、ひとり位に於いては哀しいかな彼れ常に主人たり此れ常

に奴僕たり彼れは使役動詞に屬し、此れは被役動詞に屬す。こゝ
 に至つて金には換へがたき我等のプライドの、少なからず害せら
 るゝを感ずるなり。若し夫れ地中海よりあなたにありては帶色
 人種はあらゆる意味に於いて零なり。これ恐らくは我れの之れ
 をいふすら既にあまりに幼しと見ゆるの事實なるべきも、世上何
 ゑ懣嘆の聲のみ多くして悲憤の聲の小なるや。追摸の人はあれ
 ども並行の人なく、並行の人はあれども壓倒の人なし、意氣なし。
 夜香港の町に色さま／＼の電燈の燦爛たる、赤きはルービーか、青
 きはオーバル、白きはダイヤモンド、寶石の數をつくして掲げたる
 に異ならず。

三月二十三日 午後出帆、西洋人の乗り込み多し。
 三月二十四日 今日よりプロメナード、デツキに天幕を張りたれば、

冷し。夜長椅子に倚りて月の東天に浮ぶを見る。一望真に縹緲として潮の流るゝかたに銀光落ちながら濃き油の湧くが如し。東北遙かに雲のたゞよふあたり日本にやなぎ人々語り合ふ。夜更くると共に風稍々寒ければ毛布をまとひて月に對す。下には例の三等室の兒女壯丁等幼きは唱歌をうたひ連れて室の周圍を馳せめぐり若きは三々五々月下に群して語り興す。既にして興つき人散じ満船の夜凉水の如し。寢に就きし頃は半夜を過ぎたり。

三月二十六日 暑氣ますますく加はる。海上はるかに飛魚の群を成して跳ること銀鳥の如きを見ること漸く繁し。海風の裡なほ寒暖計九十度の上にある。正午北緯八度餘新嘉坡を去ること三百七十一海里昨日正午より二十四時間の船脚約三百里といふ。夜

は例の如く甲板に群れて話しふかす。

三月二十七日 晴今日始めて携へたるケインの「イーターナル」シートを取り出だす。夜十一時半一道の光り物頭を掠めて飛ぶ。或は流星なりといひ或は電光なりといふ。

明日は新嘉坡に上陸すとて三等室の人々壯なるは荷造りに、婦女は髪など結ひあひて忙し。

三月二十八日 新嘉坡着。上陸。見物。某旅館に日本料理の晝食を呼びたり。胡瓜もみのうまかりしこと今に忘れず。例の馬來街といふを過ぎる。怪しげなる洋服して髪は佛蘭西卷といふにかぶりたる日本婦人の三人五人店頭に卓を擁して頬杖せるものあり、居眠りせるものあり。一行の人々車上より指願して國辱なりと罵るもあれば國益なりと笑ふもあり。さすがに得堪えでや、

顔を背くる女ありき。彼等が一代を思ふに戀にあらず、怨にあらず、頬に血あり、顔に嬌羞あるあひだは、彼等たゞ怨みに熱き涙をや命としけん。其の涙涸れはてこそ、眼元に浮ぶ今の笑ひは死よりも冷かに泣くべき故郷を雲と見て、身は浪枕の揺れつ流れつを、かしう暮らす月日なり。さるにてもこの地に上陸せる女兒等が、やがて讀むべき身の因果經かと哀し。

三月二十九日 晴、バナナとパイナップルとを買ふ。味よし、七歳の幼年が通學のため倫敦なる親戚の家に寄寓するなりとて一人乗り込む。外に此の地よりの乗り組み中、サイアムのプリンスなりといふ十三歳の少年あり。英人一人扈從す、稻垣滿次郎君を御存じかといへば、然り、菊石のある人にて、ピリヤードが上手なりと、覺束なき英語にて答ふ。

夜、出帆。

三月三十一日 晴、早朝、ペナン着。上陸、見物如例。新嘉坡は土の色赤煉瓦を碎きし如くなりしが、此の地のは白く光れり。寒暖計九十七八度に上りしも、夜、猛雨、雷鳴ありて涼氣到る。

四月一日 晴、暑氣甚し。灣内に黒鯛に似たる魚多し。人々釣に釣鮑を加へて之れを釣る。午後、出帆、夜、雷鳴しきりにして、海風颯々、劇電さかんに潮を射て、黒漫々の天地、光明倏忽、壯觀言はんかたなし。

四月二日 印度洋に出づ。早旦、朝暎の腫々として海を離るゝを見る。初めは朱の沸くが如く、中ごろ黄金の燃ゆるが如し。海波の光を浴ぶるさま、歡呼して、ごよめくに似たり。

四月六日 朝、錫倫島のコロンボに着く。翌日、上陸、釋迦の靈地とい

へるカンチーに遊ぶ。

四月八日 若狭丸の歸航するに逢ふ。今夜出帆。總じて印度地方の語音には我等が毒蟲などの鳴く音に連想すべき一種の音あり。ゲリ／＼と響きて石を磨するが如し。

四月十一日 晴雨三日來腕に小瘡を生じて痒きこと限りなし。同船の人この患にかゝるもの多し。或は南京蟲の害なりといひ或は潮かぶれなりといひ或は船荷の中なる菓物の蟲の螫すなりといひて定かならず。今夜檣頭に弦月を見る。

船のコロナボを出でしよりスエズに着かんまでは日を要すること二週間餘途に紅海の熱風あり歐洲航路中最難の處なりといふ。且つ海上にありて單調の生活に倦むこと既に四十日人情誰れかこのときに於いて征衣の重きを思はざらんや。夕月の下椅子を

并べて相對するもの話頭すでに盡きて、黙々として海水の走るを眺む。たま／＼遽然として船員の肩を打つありホーム、シックと叫ぶ。

船中に二つのウオッチワーズあり。ホーム、シックと、シー、シックとなり。種々の人によりて種々の場合に繰りかへさる。然かも言ふもの常に一種の笑ひを帯びて言はるゝもの多くは否と答ふ。蓋し二つのシックに批難の意あればなり。シー、シックはしばらく措くもホーム、シックは男の耻として批難せらるゝの意微に存すればなり。されど思ふ此の批難あるがために、ホーム、シックは味ひあるものとなるに非ずや。船中に外國なる夫の許へ行くといふ一夫人あり。他のホーム、シックと言はるゝ人を評して「そりや其の筈ですわね。奥さんをお迎へになつて間も無いといふではありません

か。それでホーム、シックにお成りなさらなければ、人ぢやありませ
 んわと。一結痛切なりといふべし。されどまた四十年來洋行の
 人何ぞ限らん。彼等概ね一たびは此の痛切の事實に觸れながら、
 我れホーム、シックにかゝれりと公言するものゝ極めて稀れなるは、
 豈彼等のすべて偽善者なるがためならんや。齒をくひじばりて
 泣かぬ涙に腸を断つもの、妻を棄てて子を棄てて國に命を捧ぐるも
 の世に謂ふ義理と人情とは、二つながら眞にして二つながら相容
 れざるの矛盾なり。是れ造化が與へて以て最後の宿意とせし所
 以、人生の波瀾と趣味とは、一に之れより湧く。遠征の丈夫、家郷の
 想ひを人目に包むとき、詩人はじめて泣くに堪えたり。さもあら
 ばあれ、今の世、洋行の一語はたゞ名と利との一面のみより測られ
 て、美望の的となれども、絶えて同感の的となることなし。あゝ豈

管にホーム、シックのみならんや。

四月十六日 曇紅海に入る。却りて暑氣漸く降るを覺えたり。翌
 日より初秋の如し。

四月二十日 晴衣服を重ぬ。午後スエズに着き、夕暮より運河に向
 かふ。難事業とはいへ運河はなほ未成工事たるを免れず。

雙岸の荒野、平砂茫茫として、オアシスの形をせる所には、樹木の
 よりかすかに燈光の點々たるを見る。彼所にも人生あるよなど
 思ふに、淋しく物悲し。遙かなる砂山の麓より蒼然たる暮色陰の
 如く蔽ひ来て、悲風何れよりともなく吹きすさみ、天地割開の曉、人
 間太古の廓寥も斯くやと感せらる。原人其の中をさまよふの記
 録は、やがて聖書にあらずや。

四月二十一日 朝ボート、セッドに着く午後抜錨。

四月二十二日 晴地中海に入りてより總じて浪高し。寒暖計日中

六七十度の間にあり。今夜八時過ぐる頃より月他皆既。

四月二十六日 晴此の日體量を計るに百十一磅半あり。依然たる

瘠男兒たるをば免れざれど肉食を常としてより氣の餒ゆること

少なきが如し。是れ固より後日の断定に須つべきものなれども

文學者に懶癖多きは精力の過勞に由らざらんや。他の體育と共

に肉食は正しく精力持續の一法たるに似たり。物心一致を説か

んか、そもく文學者肉食論を草せんか。呵々。

四月二十七日 朝マルセイユ着上陸見物如例。同船の邦人は大抵

この地より去りて獨と佛とに向かふ。残れるものは我れと他の

一人とのみ。他は皆外人なり。

此の地の畫堂に裸體畫を見る。市街の光景も上調子なり。總じ

て此の地の一瞥が描ける佛蘭西はなまめいたり淨氣なりといふ

をもて足れり。今はた他を言はんや。

四月二十九日 晴音樂を載せたる小船來たる。樂器はヴィオリン

と立琴。樂手は二人の壯漢と少年一人少女一人。少女の十六七

なるが衣服の褻れたるに帽は固より頂かず。白面の少年と相對

して心中の樂を彈すと聞けば興深し。舟を寄せ一曲彈じ了りて

は、少羞を帯びて錢を乞ふ。久しく樂音に飢えし我れは、之れをす

ら可憐と見ぬ。

午後出帆風浪險し船暈の氣あり。

五月一日 夜香港より乗りし亞米利加の宣教師といふもの夫婦我

れに基督教を信せよといひて聖書の全然信すべき山と奇蹟は即

ち超自然なる由とを論ず。夜半ジブラルタルの海峡を過ぎたり

といへど見ざりき。

五月二日 船首漸く北に向かふ。

五月五日 日本ならば端午なり、この朝風に無な鯉職の馴へるらん

など、人々噂し合ふ。午後英吉利海峡に入る。

五月七日 曇昨夜テムス河口にあり。今朝六時過ぐる頃、チルベ

リードックに入る。倫敦市までは汽車一時間程なり。十時下安

着。

此の航海に同船せし人々、日本人にては醫界の留學者殊に多かり
き。ペナンより乗りし洋人夫婦に一人の醫師といふ洋人同行せ
り。細君が夫をば全く忘れたらん如く、終日醫師と散歩を共にし
午眠を共にし、會話を共にするを見て、衆評紛々たり。マルセイユ
より乗りし婦人四人の一行中、主人と見ゆる若き二人は姉妹なる

べし。妹なるは十八九にや、色蒼く眼つりて。はげしき神経質と
見ゆ。これがつゆのりし疝癰か、失戀の病などいふものを治せんた
めの世界漫遊なるべしと、人々いふ、猿、小馬、車など携へたり。姉な
るは色は同じく蒼白なれど、眉殊に秀で、鼻高くとへば希臘の
女神像などを活かしたらん如し、淋しけれども氣高きところある
が常に愛馬を引きさて散歩するさま、大百姓の娘なるべしなど評し
たるもあれど、我れはスコットが作中の女姓など思ひ比べぬ。ス
コットランドのものなりといへば、殊に山水秀靈の氣を帯べるが
如く思はれたり。我が同室にはフレージャー君と呼ぶ英人あり。
性諧謔にして肖像畫を巧みにす。
(明治三十五年五月稿)

旅中旅行

(二)
 八月十四日にかしま立して、初めの二週間は北の田舎に、後の二週間は南の田舎に、倫敦の夏を避けた旅中旅行記の一節が是れである。パンク、ホリデーの季節と云ふので、同行すべて十二人にぎやかな多趣味な旅行隊であつた。勿論一行の十一人までは此の國の人で、彼等が呼んで極東の友といふ日本人は吾れ一人。更に之を品別ければ、牧師が一人、其の細君、女教師をしてゐる姉妹のミス、意匠業の人、其の細君、幾棟かの大家で、家屋賣買の世話もするといふ男、石油會社の役員、小蒸汽の持主、其の細君、建築受負業者が一人、風來の吾れを加へて、締めて十二人である。此等はすべて吾が假寓してゐる牧師の家を中心として、其の懇親な關係から集まつたものたることは言ふまでも無い。されば牧師は

一行の長老、ガブナー、チエヤマン、世話役といふ格である。當年五十九歳、半白のでつぷりとした、何所かに稚氣のある、舊のマンチエスタ、カレッツヂに學んだといふ、好人物、今は倫敦某區にユニテリアン教會を持つてゐる。發音の正しいのが自慢で、歌も昔は得意であつたらしく、若い者等が客間のピアノの傍で「ホチーサクフル、ビー」や「ピコース、アイ、ラヴ、ユー」を誦ふ時には、出かけて來て「ビスケー、オー」を誦つたり「レデー、オブ、ライオンズ(リヨン)」のレシテーションをやる。自作の讚美歌集もあれば、宗教雜誌に小話や雜録の寄稿もする。此の人が先發として倫敦を立つたのは、十日の夜、日曜の教務を了へての夜、瀛車で指すかたは例のレーキ、ヂスツリクト。ワーズワースの名と共に、人の得忘れぬ湖畔詩人の根據地である。倫敦を北に走ることに瀛車にて約七時間程、スコットランドとは山つゞきで、アイル

ランドとは島一つ隔てて相接してゐる。
 此の地の形勢をざつと言つて見れば、蜜柑を輪切にした體である。
 一葉の山脈恰も車輪の輻の如く蔓こつて、其の凹みくが深藍を湛
 えた湖水になつてゐる。湖畔の名は之から来て、此の水と此の山と
 が相寄つて、當國第一の景勝地を成す。英國の瑞西といふ稱呼で、概
 観は想像せらるゝであらう。
 數ある湖水の中、最も大なるが取りつきのウキンドミアで、長さ十哩、
 幅一哩、湖畔には小町村點在して、湖頭にある、さよやかな町をアン
 ルサイドといふ。我等一行の宿は、茲の靴屋の二階と定まつた。し
 めて八間、其の中には食堂も座敷もこもつてゐる。この先發隊から
 の便りであつた。

(二)

されば八月十四日、十時半の流車に間に合はせやうと家を出たのは
 九時少し前、ウツドのハンド、カメラを肩に、靴の中には、着替一着と小
 道具一袋、無くてならぬものが、ワーズ集とベデカーの案内記
 であらう。読みかけの書物も外に一二冊。登山用の金剛杖は家の
 人々が先年瑞西に遊んだ時の記念といふのを、其のまゝ、何れも四輪
 馬車の屋根に積んで、同乗は宅の細君と近所に住む例の二人のミス
 と都合四人、ユーストンの停車場さして急がじた。ユーストンは倫
 敦から北に向かふ線路の重なる發着點で、假りに之れを上野の停
 車場と見たてれば、吾が寓居はやはり牛込の奥あたりである、勿論方
 角はちがへど。

車中一時間ばかり三人寄つて、姦ましいレデー等の喋べり競べには、
 吾が廻らぬ舌を挿む餘地も無く、片隅に小さくなつて聴てゐれば、姉

娘は二十二三であらう、女教師で小供の世話に氣をつかへば、か、年よりはふけて見え、器量も二の町なれど、氣立ては至つてよし。全體が質素に、じみなる好み、スッロー、ハットは黒のレースにグリーン、リウスといふ取りあはせで、鼻眼鏡をかけてゐる。姉のあとから鈴生りといふ形ちで、きやつ〜と言ひながら、車に飛び込んだのが、妹で、十七八、色もすつと白く、小造りの十人並のヤングレデーと見え、たれど、顎のあたり少ししやくみて、横顔に婆さんめいた所あり。細君の紹介やら、さも〜懐かしさうな挨拶やら、形の如くあつて、馬丁は鞭を揚げる。やがて姉娘は袴のかくしから二通の手紙を取り出し、封を切つて、ざつと眼を通して、ほ〜笑んだ。

「グッド、ニウス？、スキート、ニウス？」

と細君が打ち込むと、一通は握つたまゝ、一通を細君の眼先に突き

出して、

「ミス、エーからですよ。フレンチなんかでねえ。こちらはミス、ビーからですが、フキアンシーと一緒に南海岸の方へ出かけたのですと。」

「ミス、ビーの今度のエンゲージメントについては面白い話があるぢやありませんか。お聞きで？」

「どんな話じ？聞かして頂戴。ね。ね。」

とせき込んで、向き合つてゐる細君の膝を揺すつたのは、妹娘である。「まあ、急つかちな。待つてゐらつしやい。忍耐は徳なり！。教訓になる話じですよ。之れはミス、ビーから聞いたのだから、事實でせう。ミス、ター、シーが今度の申込みをしたのは、先月の初めの日曜日で、教會の歸りであつたさうですが、ミス、ビーの方では、全く突然なので、何とも返事をしかねたさうです。併しあの通りしつかりした

女ですから返事を次ぎの日曜まで待つて呉れと言ひ延して其の晩はそれなり別かれたさうです。それから家へ歸つて、一週間のあひだ誰れにも話さないで、一人で考へて考へて、到頭承諾することに決めたのです。そして次の日曜の晩また教會の戻りに一緒になつて約束をしたのださうですが是れからがお話しですよ。其のエンゲーチメントの發表のしかたが面白いちやありませんか。月曜のお晝に家中のものがみんなテーブルに集まつた時にだしぬけにミス・ビーがわたしや或る重大なニュースを持つてゐる、と斯う言つたさうです。するとみんなが何だ、といふ。ミス・ビーが「ミスター、シーの一家に關して」といふと豫て知り合ひの仲ではあるし、みんながびつくりして、フォークもナイフも投げ出してミス・ビーの顔を見てゐると、ミス・ビーは落ちつき拂つて「ミスター、シーが結婚約束をし

たさうです」と言つたのです。みんな吹き出して、何のことだ、とは言つたが、ミス・ビーの顔があんまり眞面目なので、シスターが誰れと？姉さん」と問ふと、ミス・ビーが眞面目くさつて「ミス・ビーとです」と言つたので、皆な二度びつくりして、まあ、此の人はと言つた限りで、跡は大笑ひになつたさうです。「だが善い思ひつきね。」

と例の妹娘は言つた。細君は言葉をついで、其の午から直ぐミスター、シーは自分の家の帳面をすつかり持つて來て家の収入が是れ、自分の所得が是れ、と立派に財産の勘定をして見せて、ミスター、ビーとミセス、ビーの同意を求めたのです。

ミス・ビーといふのは吾れも知てゐる。寧ろ瓜核顔の、あどけない物

の言ひぶりをする、優しい東洋趣味の美人である。速記やタイプ、ライターが上手で、月給の貯蓄も少なからず、全體が思慮ある女といへば、是等はいかにも思慮ある結婚約束である。併し吾はつくづく思ふ、此の夫婦の行末は果して幸福と極まつてゐやうか。思慮撰擇は大事であらうが併しそればかりで夫婦といふ縁が圓滿になるかは疑問である。

と斯んなことを考へてゐるうち、馬車は停車場に着いた。こゝで落ち合ふべき他の一連が一気車後れたので、借切りの一室に吾等四人、列車が動き出すと話し、の緒が切れて例の妹娘が機械のやうに喋り出して、細君が「チャター、ボックス。チャター、ボックス」といふので、一寸一場の言ひ合ひがあつて、倦んで疲れて、細君が「コナン、ドイルの『デュエット』を読んで、獨り笑ひをすれば、妹娘は六片本の『秘密の家』

といふやうな物を読みかけて、居眠りを始める。妹娘は熱心に刺繍をしてゐる。

日本のレデーの噂が出ると、屹度藝者ガールが引き合ひに出る。着物や髪物のことを聞きたがる女の人情は何所も同じだ。妹娘の問ふには、

「日本のレデーはフエヤーの方がよいのですか、ダークの方がよいのですか。」

妹娘が側から、

「わたしはダークの方がよいのだと聞きました、さうですか。」

といふ。髪の話なら無論日本ではダークの方がよいのだが、肌の色なら兩方であらうと吾は答へた。勿論日本人本来の皮膚の色が白いものでもダーク側の白味で、どちらかといへば、西班牙、佛蘭西

の肌に屬するのであるから、美人の肌の形容にも雪の肌といふことがある。自分の思ふには、雪にたとへた所が、寧ろ冷い白さ蒼につらなる白さといふ心をあらはして、ダークレデーを貴ぶ意味になる。併しまた美人の肌の形容に、櫻色とかルビーを薄絹に包んだやうなとかいふこともあつて、之れは明らかに温かい白さ、紅につらなる白さを意味したもので、即ちフェアレデーのことである。と説明した。但し之れが當つてゐるか否かは知らぬ。そこで此方のはと問ふと、細君が、

「やはり兩方ですけれど、わたしはダークの方を好みます。」と答へた。恰かも列車がとある停車場に着くと、茶の廣告が何かに、大幡の日本婦人の繪が無様に描かれてゐるのを見て、一人が、「イエローレデーも善いのですか。」

と問ふ。あんな繪ではといふと例の細君が、

「イエローレデーでも善いことがありますとも。ホール、ケインの『イターナルシチー』をお讀なすつて？」

といふ。蓋し『イターナルシチー』の女主人公ローマは伊太利一の美人で、イエロー、コムブレキシオンともゴールドデン、コムブレキシオンとも、そうしてグイオレット、アイスにレーヴン、ブラック、ヘアード作者が書いてゐる。即ち黄金の肌に、董の眼、濡羽鳥の髪、の毛といふので、細君が之れを想ひ出したのは、時に取つての頓智である。さて流車は倫敦を離れてより、ノーサンブトンからスタツフォード。マンチエスターとリヴァールの間を抜け、プレストン。ランカスターと、蜘蛛手のやうな線路の中を潜り潜つて、ウキンドミアに着いたのが五時過ぎ、車上の眺めは、ことさらに書くがものも無い。茲よ

り乗り合ひ馬車でアンブルサイドの宿に向かふ途すがら山色水隈は之れより愈々非凡となるのである。

ワーズワースの眼には羊飼ひも羊も百姓も山も水も溶け合つて一つの自然に没してゐたといふが更に此の邊の山水とワーズワースの間にも區別は無い。此の詩人はやがて此の山水の眼目となり生命となつてゐる。土橋の石垣にもたれて夕ぐれの風淋しい金髪少女も問へばワーズワースが遺蹟を語る。「ウキ、アー、セヴン」の熱き涙は、この少女にこそと思はれる。羊追ふ老夫が諄々としてライドル、マウントの夢のあとを説くのも、「ゼ、ラスト、オブ、ゼ、フロック」に、彼れと詩人と同じ生命に活きたればであらう、されば此の地の景色に筆を染める吾れは、ワーズワースを外にすることは出来ぬ。

(三)

煩瑣な紀行は略して、この地、ウキンドミア湖のつぎがライドル。グラミアスア、何れもワーズワース集で人の知つてゐる名水で、コニストンに沿ふては、ラスキンの舊跡がある。山はヘルゼリン。スカフエル、バイク。ラングデル、パーク。瀧はライドル。ダンジョンギル。ストックギル。舊跡にはワーズワースがグラミアスの舊宅、テイドル、マウントの舊宅、彼れが慕ひが學びし學校、彼れが宿りし家、彼れがいたづらせし刻み目の壁や卓子や、ラスキンが慕も、ハートレー、コールリツチが慕も、デクキンシーが住みし所、ハリエツト、マルチノーが住みし所、數へ來たれば限りもない。ヘルゼリンを此の地第一の名山とすれば、登臨俯仰の感は之れに止めてもよい。ウキンドミアを最大多趣の湖水と見れば、明月の夜、露落ちて簾聲靜かなるの興も、之れに止めることが出来る。其の前

に、一夜は晩餐後の食堂の會話をも聞くがよい。

護謨管仕掛で卓子の皿を動かしたり、催眠術の真似をして人を驚かしたり、パーミノロジー。フレノロジーから骨牌の手品までしつつして、今宵は人々唯卓子に肱杖ついて話しに耽けるといふ、土曜の夜の夜隅の安樂椅子で小説を読み始めた夫の姉娘を見かへつて、
「レデーシッブ！。何を讀んでゐますか。ちよつとまあゐらつしやい。あなたに聞きたいことがある。小説？。うう、小説か、其事だ。家の娘がいや家の妹が、そのむやみと小説を讀んで困る。わつしや、さう思ふが、若い娘が小説ばかり讀むのは善くないと思ふね。どうでせう。」

是れは建築受負業の六十左右の赤ら顔で、金は持つてゐるといへど、教育は無いらしい卑しげに肩をゆすぶり、盛んに手真似をする、一行中最も道化した元氣のよい男である。一人の娘を遺して妻君に先立たれ、内々若い後添を探してゐるといふ形であらう。其れがむやみと件の姉娘にちやれては、一行のからかはれ者となつてゐる。是等は日本で見なれた光景だ。姉娘は閉口の體で、

「そこをお除なさいよ。暗いちやありませんか。あなたに若いお妹さんがあつて？。あは、若いお妹さんが？。あなたお幾つ？。」「
「アングル！。グラランドパー！」

と呼びかけたのは牧師の細君である。是れは既にしばしば出て來て讀者とも近づきであるが、五十近い鋭くて心得のよい、聞かぬ氣のしつかりものである。自らは、ミス、ナイチンゲールの跡を慕ひ、政治はむしろチェンバレン最負で、ミスチンズム。スピリチュアリズムといふやうなものも好き。女は女の社會、家庭の社會にはたられ

ば其でよいといふのは、穏和な女機論で男は結婚後妻に對して薄情になるもの、男は女よりも常にセルフキツシユなものといふのが其の男子觀、自分は如何様の男をもマチーシユする力を有してゐるといふが其のプライドで、一週に二回づゝ母に手紙を書くのが何よりの楽しみだといつてゐる。されば好人物の老牧師とは、正さに兩極性の和合で家庭も美しい。日本の十二支の話して、牧師の歳を辰だと言つてからは、夫を呼ぶに「マイ、リツツル、ドラゴン」といふやうなことを言つてゐる。其れで夫婦議論でも始めると、ルツク、ヒアー。マイ、フレンドといふ勢ひである。同じ筆法で右の建築業者を嘲けるには常に「アंकフル」グラランド、バーの稱呼を以てする。

「あなたのお娘御が小説を讀めばなせ悪い。あなたは何を讀めば善いと思ひます。」

「さうさ、僕は歴史が善いと思ひますな。わつしあ羅馬の歴史が好きだ。だが奥さん、今日のアメリカン、レデーは奇麗でしたね。ゑゝ？、さうは思ひませんか。」

「駄目ですよ。もうエンゲージして居るといふにねえ。わたしがリングを見たのですよ。諦めて、レデーシツプの御機嫌でも伺ひなさい。」

「ひゝゝ。お！、レデーシツプ何所へ行つた。お！、お隣りか。是れはしたり有り難い。」

とびたり額を叩くと直ぐ向かふの意匠家の方を見て、

「併しどうでせう、小説は唯想像を書くばかりで、教訓に少しもならんでせう。事實で無いから。」

話しかけられたのは三十許りの舌たるい口の利きやうをする好男

子である。

「わたしはさうは思ひませんね。小説は快樂を興へればそれが即ち目的で、教訓も同じことです。それに事實でないとおつしやるけれども、有り得ることですから事實も同じでせう。」

と末の方はやゝ怪しくなつたれども、日本でそこの雑誌でも拜見してゐるといふ氣味。次ぎは細君の番で、

「そこが小説の善いのと悪いのとある所以ですよ。快樂はあつても害になるやうな小説は世の中に必要は無いでせう。快樂もあり教訓もあるのではなくては善い小説とはわたしや思ひません。」

何所までも英國氣質である。黙つてにこ〜としてゐた牧師は口を挿んで、

「害があつては悪いが、害さへ無ければ小説は快樂のために讀むがよ

い。わたしはさう思ふ。わたしはさう思ふ。」

と思ふのふに力の入つた調子でおだやかに言つた。

「オー、ノー。」

と反對したのは細君で、牧師はやはりにこ〜しながら、

「オー、イエス。」

「オー、ノー。」

「イエス。」

「ノー。」

「イエス。」

「ノー。」

としばらくは「イエス」「ノー」の太刀打をしてゐた。

「奥さんは小説は何んなのが好きですか。」

と意匠家が尋ねると

「わたしは寧ろローマンスが好きですけれど、ミセス、ハンフレイ、ウォードも好きです。『ロバト、エルスミア』ですか、勿論ですとも。一番の傑作でせう。ライダー、ハガードも好きです。」

「ライダー、ハガードですか、丁度『ピアトレス』を妻が今読んでゐます。」
 かたへを振り向くと、若い、ダークな、華奢な細君が、ちよつと會釋をした。是は父は猶太人とかいふので、極めて静かなレデーであるが、病身で瘡持ちといふ趣である。人の見ぬ間にはちよつと亭主を睨んで、何か一言二言さうやいては泣き顔をして見せる。素性の上のひがみもあるか、或る時散歩連の一人が五六尺向かふからさすらの猶太人のやうに、皆な何を愚圖々々してゐるのだと怒鳴ると、此の妻君の額に忽ち青筋の走るのを吾れは見た。見てむしろ哀れに

感じた。閑話はさて置いて、其の細君が會釋ばかりで俯いたので、意匠家は更に、

「わたしは古い所ではスコットも善いのですが、デッケンスが一番好きです。おホ、思ひ出しても可笑しいのがある。近頃ではホール、ケインも善うござゐます。」

「ゼ、クリスチアン」ですか。はあ、あれがあの人の名を成した作でせう。『ジ、イターナル、シチー』も善うござゐますね。それからコナン、ドイルですか。やはり『アドベンチユアス、オブ、シアーロック、ホームズ』が面白く思ひます。わたしはガイブリースビーも好きです。『ドクトル、ニコラ』お読みですか。」

傍らの妹ミスがだしぬけに、

「わたし、ガイブリースビーの『ラヴ、メイド、マニフェスト』を読んでほんと

うに泣きましたわ。」

「おと馬鹿らしい。イングリツシユ、レデーがあんな物を読んで泣く
 といふことがありますか。」

一行の取締りといふ權威を具へた例の牧師の細君が言ふと、牧師は
 小供をあやすやうな調子で、

「オールライト。グード、シング。」

妹ミスの身方をしてゐる。

「オー、ノー。」

「イエース。」

「ノー。」

と、またも押し問答が始まりかけた時、伴で會社に出でゐるのが口を
 出した。因みに言ふが、此の細君等論争は好きでも、あとは誠に奇麗

なもので、思想の自由。フリー、カンツリー。ブロード、マインデッド
 は紳士淑女の誇りだと言つてゐる。

「僕は『ピートルス』を三度讀んだ。」

こゝらが日本ならば浪六物の愛讀者であらう。細君はわたしはシ
 ヤーロット、ブロンテの『ゼーン、エヤ』を三度。父がやかましかつたの
 で、内證で、友達から借りて讀んだものですよ。」

其の外、ジョージ、メレチスはむづかしい、キツプリングは好かぬ、トル
 ストイはシヨツキングであるといふやうな説もぼつ／＼出かけた
 頃、話題は他に轉じた。

簡単に今一席つゞけると、次ぎは結婚の事である。是れはむしろ吾
 れが聞き手で、細君か説明者、起こりは、誰れかの金蘭簿の、今の青年觀
 といふ項の下に、「カラーとチクタイ」と記入し、今のヤングレデー觀の

項下に「金のある夫」と記入しあつたのに基づいて、夫の馬車中での結婚問題が、ふと吾が胸に浮んだので、レデーの前でぶしつけかは知らぬが、英國のヤング、レデーやヤング、ゼントルマンは、何を結婚の標準にするかと問ふと、細君は造作なく答へた。答へる前に日本では何うかと反問した。吾れの答へに、自分の理想は別として、普通には今茲にあつた通り、金や地位を標準にするもの、又は容貌ばかりで結婚するのも随分あるが、本當の所はやはり性質教育といふやうなものであらう。細君の曰はく、性質教育の上に今一つ貴いものがある、其れは戀愛である。戀愛が一番で、性質教育、財産は其上の附けたり、何れが一つあつてもよいと自分は思ふ。結婚はやはりラヴ、マツチのこと。と色々クキンやプリンセスの例など引いて辯じた。ところが概して東西思想の違ふ一點でもあらうが、味ひある問題だ。夫の極

端を好むものに言はせたら、戀愛だにあれば、思慮撰擇は結婚の面にゼロだともいふであらう。吾が本心はさうは言はぬ。唯しかし戀愛あつての後の結婚と結婚の後に生ずる戀愛と、どちらが人生の幸福であるかは考へ物だ。

北英山水の概観

英國でも就中イングランドの景色は、南と北と全く趣きを異にする。と稱せられてゐる。南は概して圓く滑に、穏かに平か、北は山水奇抜ちやうど我が中國邊の或る部分と東北地方との差の如きものである。併し是れは英國内での比較に過ぎぬ。今若し我等の目から概観すれば、イングランドの景色全體に一つの調子がある、假りに之れを最もサズベスチヴな言葉で言へば、牧場的とでも名づけんか。

南英は言ふに及ばず、山水奇絶と稱せらるる北英湖水地方ですらも、我等日本の風光に慣れた目には、穏やかなり柔らかなりといふ感を惹く。

假りに例を我が往時登臨の記憶に取れば、日本の高山といふもの概ね數千尺の上に出でざれば奇と稱するに足らず、山中また嶺巖多く、樹木繁く、奔湍飛瀑あるを厭はず、溪谷の勝に富み、風雲の變を藏する所に趣味の中心がある。

翻つて北英の景色を想ふに、決して山が少いではない。スキドゥ。ヘルペリンの山々連亘して、大なるもの小なるもの、圓さもの尖れるもの、曲折離合の調和に言ふべからざる面白みのあるは、他國の山嶽にも稀なる程と稱せられる。併しながら其の山が三千尺に上るのは甚だ稀れである。また山間に飛瀑の懸かるといふ景色も多少

はあれど、これはた遠く山腹に曳ける銀糸の如く、所謂Y字形W形に全山の平面を象徴するところに最も趣味がある。樹木も山麓などには生ひ茂つた所もあれど、到底千年の檜杉に日暗く風吼へるといふ趣は見られない。稀れに石青く水澄んだる谷川があれば、兩岸見わたす限りの牧場で馬が悠々と水を飲みに下りてくる。

蓋し北英の景色は、山にして牧場水にして湖水、この二大ノートに由つて調子を定められてゐる。平地や丘はいふに及ばず、高山の斜面一體に、水分に富んで青草茂り、頃しも八月の空ながら草の緑り殊の外淺く黄に近づいて、我が春の野菜の花頃の酔ふが如き情を持つてゐる。其の中を幾群數知れぬ羊のさまよふ趣き、其の静けさのどけさと言つたら、無い。春の日南窓の晝寢といふ心地である。

更らに之れが夕ぐれとなれば、今まで緑りであつた山々も、裾の方か

ら青くなり黒くなつて暮烟の中を遠くから羊の鳴き交はず聲がさ
もく悲しげに腸に泌むやうである振り仰げば所謂イングリッシ
ユ、サンセット。黄金の入日の眩ゆさもこの時に見られる。半ば春
きかけた太陽の周に漂ひ来た雑多の雲、さては山の頂端だけが酔つ
たやうに染まつて光つて後を向くと後の丘が牧場の一區域だけ黄
がうつた緑りから全く柑子色の毛氈のやうに變つて光澤を持つて
ゐる。そして自分の立つてゐるあたりは段々灰色に變つて行く。
今まで景色の中に入らなかつた羊飼ひの家も窓に燈火が見えて初
めてあたりの静けさを照すかと思はれる。
山が以上の如き調子であるから水も是れに調和せざるを得ぬ。流
るゝ水よりも溜れる水、浅く白き水よりも深く蒼き水、さゝやく水よ
りも沈黙せる水の方が、一層よく此景色にかなふ。則ち湖水の無か

るべからざる所以である。總じて此の地方の湖水はあまりに大き
くはなけれど、周回の曲折甚だ豊かに水隈の趣きに富んでゐる。ま
たタインと言つて遙かに平地を離れた山脈の窪みに小湖水を成し
てゐるものが多い。殆んど人間と相絶た山あひに、青玉を展べたや
うな水を湛へ、路踏み迷つた羊の來り飲ふに任せてゐる様は得も言
はれぬ平和さである。

之れを要するに、湖水、澤、草原一面の連山、牧場、柔和を代表する羊、凡そ
此れらのものが支配してゐる湖水地方の自然の中に、夫のワーズワ
ースは極めて平和な家庭生活をしどげたのである。

世の評論家の云ふ如く、ワーズワースの詩には佛蘭西革命の最後が
多少の影響を與へてゐるのも事實であらう。また所謂十八世紀文
學の反動の籠もつてゐるのも明かである、恐らく温厚正直にして情

に篤い天稟の性も其の作にあらはれてゐるに相違ない。さりながら、彼れの詩を読んで最も思ふのは、其の調子の正しく湖水地方の自然と律呂を同じくしてゐることである。即ち其の詩に存する音楽が周囲の自然と誠によく調和してゐる。此の意味よりいふときは、ワーズワースはげに湖畔詩人である、自然詩人である。湖畔の自然が彼れを作り、彼れの詩によりて其の美なる生氣を呼吸し、彼れの詩によりて其美なる調子を吹奏してゐる。されど若し自然詩人といふを以て、單に花鳥風露といふが如き自然的對象と之れに對する我が感情とをのみ咏するものと解する人があつたら、それは大なる間違ひである。いや單に斯くの如き自然詩人もあり得るであらう。また單に斯くの如き自然詩も美なるを得るは事實である。併しながら一層大なる趣味欲を有するものは到

底自然の景象を受けるの喜びのみに満足して之れに留まることを得ず、振りかへつて更に廣大豊饒の天地に入り、こゝに無限の情趣を味はんとする。夫の自然の景趣を通じて更に冥想の新天地に入るものは是れである。少なくともワーズワースの場合が是れである。且つ湖水地方の風光が我等の情に觸れるの様は、之れを激して撼かすに非ず、撫でよ揺かすなり。是れ其の一層容易に人をして内省に入らしめ冥想に入らしめ得る所以、ワーズワースは實に湖畔の靜な自然に抱かれて、斷えず冥想の天地に彷徨してゐたのである。自然を歌ふよりも寧ろ冥想を歌つたものと言つてよい。所謂ミュージングの樂しきは彼れの唯一の詩源である。彼れの陶然として美なる山水に坐するが如きとき、其の心は却つて内に向つて冥想の天地を辿つてゐる。而して冥想の天地はやがて彼れみづからの天地で

ある否な自然に對する人間の天地である。さればワーズワースの詩また他の人生詩人と同じく作者の人間作者の冥想を味ふに至つて趣味はじめて湧く。夫のたゞ自然詩人といふ名によつて彼れを乾燥といひ平凡といふが如きは彼れが集の幾ばくをも讀まずまた讀んで味ふの力無き徒が妄言のみ。ワーズワースの眞價は其の冥想の内容特色を検するによつて始めて斷定するを得られやう。予は是れを以て恰好なる別の論題とするものである。

詮する所湖畔の風光とワーズワースの詩とは互に相負うてゐる。山水は彼れに調子を與へ彼れは更らに翻へつて其の山水に生命を附し人間を添へ以て自然の内容を展開し豊富にしてゐる。

(明治三十五年八月稿)

基督の再來

其の後は御無沙汰益御盛んのことと存じ候何がおたよりもとは存じながら例の通りの疎懶丁度紙上に迷信云々の記事を拜見候より思ひつきて唯今當市にて大騒ぎの最中なるアガベモニ(愛教)のこと一二申上ぐべく候恰も去る七日の日勤行の砌此の宗の教會にて牧師のピゴットと申す人突然我れこそは基督の再び此世に來たれるなれとの宣言をなし此事世に知るよと同時に市中衆俗の人氣一時に沸騰して非常の騒ぎに有之候。

當國は御承知の如く歐米各國中にて少なくとも外形だけは最も宗教に篤き國柄に候へばそれだけ基督生まれたりなど申す事は人氣を惹くこと強く到る所此の噂ならぬは無之有様に候また實際我

等の眼より見るときは、夫の戴冠式など申すものよりも、餘程面白き現象と存じ候。一方には教育案が議會の大問題となりて、教育宗教の關係論を生ずると共に、一方にはユニテリアニズムなどいふ際ごき宗教すらある世界文明の真中に更に此の奇現象を加へて、我等觀風の人をして轉た興の深きを覺えしめ候。本國のことなど思ひ起こしては、ほく笑まれ候ことも多く候。まことに宗教といふものゝ前途は如何、此種の問題に關しては、寧ろ當國こそ研究の便宜多かるべしと存じ候。何れ其の内例の滯歐文談にてなりとも見聞相つくし申すべく候。

アガベモナイツの教會はクラブトンと申して北倫敦の町はづれに有之、恰も小生が寓居より數丁の處に候まゝ、去る十四日の日曜には、物すきにも見物に出かけ申し候が、非常の人出にて、容易に這入ること出来ず、數千の群衆教會前に押し寄せて、時々鯨波の聲をあげ候さま、凄まじき光景に候ひき。

そも此のアガベモニーと申す宗派は、今より六十年許り前に、プリンスと申す牧師の開きしものにて、其の名の示す如く、愛を中心とすと號し、其の教會宗宅をば、愛の住居と唱へ候。唯これだけにては無難のやうなれど、併し無暗に愛とのみ申し居り候うちには、随分危険の分

子も入り來たらざるに非ず、聖天のためしなど想ひ起させ候。聖天様、天理王などの比較は存せず候へど、例へば、教會の柱の形ちに或る如何はしき意味を含むと云ひ、または勤行のうち、全く燈火を滅して、暗黒中に行ふの儀式ありといひ、其の他怪しからぬ噂すら世に立てるを見れば、此の宗派の大凡そは推し測られ候。宗祖プリンスと申すは、不思議に一種の魅力を有したる人にて、初め

唯の牧師補など勤めし際にも其の非常の熱力に感化せられて婦人
など往々に精神に變態を來たすまでなりきと申せば、一種の人格な
りしことは事實と見え候。

されど果して彼れが聖者なりしかは疑はしき次第に候、勿論此種の
宗派の常として相手は多く婦人にあり、就中三十四以上と云ふ年
頃すぎしスピンスター、すなはち老令嬢が最も多く其の歸依者なり
といふ、プリンスは最も此の種の信者を引き入るゝに妙を得、また信
者の手より金銭を取り出すに長じたりと申す、彼れは専ら富める婦
人の感化に注目せし由に候、されば彼れが生前に集めし財貨は何十
萬と申す高に上り、其の教會は勿論自宅にありても榮耀榮華をつく
し、信者の名を以て、また神の愛、基督の愛といふ名を以て、美女の信者
を左右に侍らせ、または財貨を得んがためには、富める老令嬢に若き

夫を媒ちして、其の歡心を繋ぐなどのこともあり、場合によりては、輕
はづみなる日本にも歡迎されかねまじき主義と存せられ候。

プリンスまづ、基督は再び我が上に來たるべしと豫言し、世界の終極
は近づけりと呼號して、幾多の信者を得しが、此の時は場所の地方な
りしたためと宣言の今回ほど仰山ならざりしたため、非常の騒ぎとまで
はならざりしものか、されど其の常に都會に疎き所をのみ選び、世の
攻撃と迫害とを避けたりといへば、反抗を呼びしは明かに候、茲に迫
害といひ反抗といへば、プリンスなり、ピゴットなりの側より申せば、
如何やうにも解釋はありて、時勢に先だつものは反抗せられ、豫言者
は迫害せらるるなど申すべく候へども、是れは斯かる場合の紋切形に
て、一向異しむに足らず、善くも悪しくも、口眞似の出來る重寶語に候、
現に日本など、にころがり居る、生まわかき豫言者や、時勢の先達を御

覽せらるべく候。

さてプリンスは自ら我等は凡て兄弟たり姉妹たれば結婚してみづから縛し自ら限るの要なし自ら限るは罪の始めなりと主張しながら再婚まで致し我は不朽不死にして汝等を濟ふべしと唱へながら千八百九十九年八十九歳を一期として死し候。次いで此の宗派を率ゐたるはビゴット氏なり之れより先き不死と公言せしプリンスは死しやがて來るべしと豫言せし救ひの神は來まさざるより宗内やうやく動搖を生じさしも疑り固まりの信者すら一人二人と滅び行きて残るものはひたすら今年は神の來迎ましますか來年はメサアアの約事實となるかと待ち居り茲兩三年が間に何とかせでは宗門の前途にも拘はる大事となるべき形勢に立ち至りたるものと見え候ビゴットは斯くの如き機會に乗じて立ちし

ものに候此の人もとは救世軍英國教會等を涉りあるき終に愛教に投じたるものゝ由にて意志強く野心的に且つ不思議に人を動かす力を有する人物と申せば宗祖プリンスに似たる人らしく見え候。去る七日の夜クラブトンの教會に於いて例規の勤め終ると共に長身瘦軀の一紳士肅然として傍への椅子より身を起こし説教壇に立ちあらはれて其の深く沁み入るが如き口調もて説き出だすやう第一二の救ひは必ず來たるべしプリンスの豫言は偽りならず彼れは其の準備のために神の御前に送られたり而して今こゝに神は來迎ましましたり人々の目前に立つ此の我れこそは基督の再來なれ見よ我れは神なり人々を濟はんがために茲にメサアアは現はれたりと、尙ほ數々斯やうのつらね基督の口眞似ありて席に復し頭を兩手に埋めて麒麟の形ちせるあひだ一堂森として水を打ちしが如くやが

て兩眼に感涙をにじませたる信者等かはるゝ立ちて之れに見臨
 を與へ見よ神は我等の前に現はれ玉へり嗚呼神よ基督よ神を祝せ
 よ救済主を祝せよなど叫ぶものあり人々狂喜感激のさまなりきと
 申す斯かるためしは我が佛敎史には珍らしからざるべく其のかみ
 十字軍が初めてゼルサレムの地を踏みし當時の心根も想ひやられ
 て一派の人より申せば箇中に眞理ありとも申すべけれど所詮は外
 形の論也感激は眞理なるを得べけれど稚き感激稚き信仰は到底稚
 き眞理たるを免れず夫の信仰を説き感情を説くものが自盲してさ
 ながら傍らに信仰感情を拒絶せんとするの敵あるが如く驚駭しひ
 たすら信仰感情の名に拘らひて其の内容の必然の變遷進歩を思は
 ず内發の破壊進歩の楷梯たるべき破壊をば外形の回復によりて保
 障せんとす愚の極笑ふべきの至りに候はずや世に進歩あり進歩は

必ず知識の媒介を要し知識は必ず事理の兩面より作用す此の根本
 の一案を外にして信仰感情を喋々するも何の用をか爲さんや彼等
 そもく知識は事の一面のみにして成就すと信するかはた進歩は
 知識を介せずして成ると斷言し得るか更に進みて一切の進歩を否
 定し今を捨て古生活に復歸するの眞心あるか彼等若し正氣にし
 て斯くの如しと言はゞ速かに之れを別行すべし我が徒見物に出か
 くべき也。

さて議論が枝葉にわたり候へども七日の夕は右の如くにて了はり
 此の事翌日の新聞にあらはれ候より忽ち倫敦中の評判と相成りた
 るものに候其れよりと申すものさしも閑靜なりしクラブトン界限
 は徒歩に自轉車に物すきの見物引きも切らず去る十四日の日曜に
 二回目の宣言式あるべしこのことにて前に申せしが如き騒ぎと相

成りし次第に候。

此の日は午前十時半よりの開始にて、公衆にも参席を許すとのこと
に、九時頃には早や満員となり、他は皆門外に群衆せしものに候、數名
の警官非常を戒め、二名は教會の入口に立ちて、一人の聴問者出づれ
ば一人を入ると申す有様に、戸の開く都度門外の群衆は鯨波の聲
を揚げて押し寄せ、後には馬上の警官も見受け候。

されど説教は先づ事無く終はり、申候唯間々にうしろの方の聴問者
より、馬鹿を言ふな、嘘つきなどの妨害起こりしのみ、宣言の要旨は前
回と同一にて、我が愛する人々よ、我れは人々を愛するなり、我れに來
たれ斯く言ひつゝある我れに、此の口をもて言ひ、此の眼を以て見、此
の心を擧げて人々を愛する我れに來たれ、人々のために死したる我
れ、人々を救はんがために再來せる我れ、神來まさんの約を果たせる

我れに來たれかし、人々を見るにつけ、人々の世のさまを思ふにつけ、
哀れさよ、闇黒虛洞の現世より汝等を救ひ出したき立願に、我が心は
溶くるばかりぞ、されば茲に、人々は神に會向して、死より悲しみより、
失望より救ひ出ださるべし、人々たゞ知れかし、我れは人々を愛する
なり、神は人々を愛するなり、神の愛とは是れなるぞ、汝等の中には熱
き真心もてるもの多し、知れよ、我れは汝等を愛するを、何所に見ゆる
も、我れは常に愛なるを、さてはこゝに真心もて我れを迎ふる者に、我
れ永劫の平和を興ふべし、嗚呼、平和、平和、平和、人々と共にあれ、平和を
して汝等の上に来たらしめよ。

式の了ると共に聴問者は騒ぎ立ちて出でけるが、ピゴット氏の立ち
出づるを待ち居たる見物は、大浪の如く馬車の周圍に寄せ來たり、罵
るもの嘲るもの混雜いふべからず、忽ち杖をあげ傘をあげて頭上め

かけ打ち込みしものあり怪我は無かりしならんも随分の野蠻騒ぎ
 と見受け候、アガベモナイツに取りては是れやがて外道どもの眞の
 教を迫害するにて昔も基督も猶太人のため石をもて撃たれんとし
 きと申すべく、また何時までも此の辭柄によりて世の非難に對すべ
 しと存じ候へど、反對者の側にては所謂識者と申す際は鼻であしら
 ふといふ様、宗派氣質の強き人々と多數の下層社會とが色々の動機
 より斯く騒ぎもし、亂暴もするなれど、兎に角全體に大人しく秩序を
 重んずる當國人に斯かる亂暴をなさしむるに至りしは、以て其の如
 何に人心に撞觸せしかを見るに足るべく候。
 昨十七日の夜も教會に祈禱などありとのことにて例の如く見物押
 しかけしが、今回は前例に懲りて警官の保護非常に嚴に幸に何事も
 無くして散せりと申し候。

尙のちくの事は此の地の新聞にて御覽ありたく、小生よりもまた
 其の内とは存じ居り候早々。
 (明治三十五年九月十八日稿、讀賣新聞)

英米の同情

風騒ぎ雲驚く故國の空を眺め候ては、我等飄遊の身も流石に夢安か
 らぬ夜半多く候、此書面編輯机上に着し候頃は、二月も未定めて和戦
 の事すでに定まりての後と存候へど、他日の御参考とも相成るべし
 と存じ、小生が見聞の上より歸納したる當國人目下の日露觀といふ
 もの、一二申上ぐべく候。

固より新聞雜誌個人團體百人百様の見解は有之べきも、總じて彼等
 が中心に滿幅の好意と同情とを日本に寄せ居り候事は、申すまでも
 なく、殊に新聞紙の如きは「タイムス」を先鋒として「デーリー」テレグラ

フ「スタンダード」モ「モーニング」ポスト「デーリー」メール」など保守黨の新聞はいふに及ばず、反對黨のものといへども、殆んど凡て、及ばん限りの力を日本の辯護に盡し呉れ候こと、當國にある我等に取りては如何にも嬉しく、時としては覺えず讀みながら、紙上に感激の涙にじますことも有之候、好辭を喜ぶの心と笑ひ給ふな、感激相應の刹那は、人生これに過ぐるの眞實あるべしとおぼえず候。

事實、日露が砲火の上に相戦ふの前、歐洲に於ては、大陸の諸新聞紙を通じたる露國の外交政策に對峙して、英米の新聞紙殊に「タイムズ」などの有力なるものが、盛に日本の爲に奮戦しつゝあるの狀、そごろに人をして頼みある友誼に感泣せしめ候。

當初露國が半面東亞に對して威嚇と壓迫とを其の政策とせしこと共に、他面歐洲に對しては、己れ平和の味方と號して、日本をあらゆる惡

稱の下に歐洲殊に英米人衆の同感より孤立せしめんとせしこと、隠れも無き事實に候はずや、而して此の外交策の根據となれる觀念は、下の如く候べし、第一、人道の觀念よりして、平和を貴び、戦亂殺傷腕力を厭惡するの情が深く、其の文明に根ざし居ることは、意想の外なること、即ち是れを利用して、日本を好戰の民血を見て、并舞するの民、精神の文明の敵となるべき國民と強いんとする也、第二、日本は支那朝鮮を兼ねて、所謂黄色同盟の下に、白人と戦はんとする者也、強い、以て人種的反感を煽動する也、第三、宗教的偏頗心に訴へて、日露の争は直ちに基督教文明と非基督教文明との争也、と強辯する也、第四、英國が近く南亞戦争の爲に蒙りし手疵は、容易に癒ゆべくもあらず、所謂平和を樂むの念は、目下の英國に於て最も旺盛なりとす、則ち其の再び戦渦中に巻き入れられんを恐るゝの情は、自然に強く、當國人の心

底に潜まざるを得ず敵すなはち此の弱點を利用して支那の態度朝鮮の態度みな以て日露の戦を日英對露佛の戦に變ずるの恐あることを説き英國をして日英同盟を悔るの地に立たしめんとする也。凡そ以上の諸理由に對して日本が幸に其中傷する所となるを免れし所以のものは主として英米の新聞紙が一々辯駁争議の勞を吝まらずして民衆を惑はしめざりしに由るものと存じ候此の點より申さば此等の新聞紙は我が國光榮の爲に奮闘せし勇者也國民は事局定まるの後に於いて必ず意氣相酬ゆるの道を講せざるべからずと存じ候。

日本政府の施爲の跡にも右の如き露の外交策に陥いれられざらんと力めたるの影は歴々たりと申すべし内面の事は小生等の興り知る所に非ず少なくとも當國の人々が惡を見ずして善を見んとする

の心より日本の施爲を解釋する所によれば日本が冷靜の態度を以て交渉遷延の間殆んど日本に一利無くして露國に百利あるの二三箇月を耐へ來たりし心事ひとへに血に濁き槌に狂ふの惡名を避けんとせるに外ならず則ち英國民が是非を言はずして先づ此の事實に滿腔の讚意を呈せるは敵の前我が友の弱みを見せじとする誠の友愛に候はずや。

然れども事局の將來に對する判断は此の一事實より來たるものゝ如く候思慮ある者は以爲へらく結局の事利にあるべし何とならば日本の方針始めより和にあればなりと露國みづから戦を宣せんとまで蜚語する今日なほ解決の一刹那は平和にあらんと信するものあるは實に日本の施爲方針の當然の結果しかあらざるべからずと考ふるが故に候べし其の理路は簡單に下の如く候べし。

第一、露國の滿洲に費せる有形無形の勞力は如何に大なるかをだに知らば結局如何なる事情に於いても滿洲還附の一事のみは兵火の外露國をして之れを承諾せしむるの途なきこと初より明白也。

第二、日本政府が交譲折衝によりて此の一件をも成就し得べしと考へざるときは全く不可有の事なり。

第三、此の一件だに露の面目を立てなば他は露に於いて兵火にまで訴ふるの勇氣断じて無し。

第四、故に和戰の決は初より日本にありて露にあらず言ひかふれば、和戰の岐頭は滿洲撤兵の一點にありて他にあらず如何なる形に於いてか滿洲の領有を露に許すことあるべしと思はざれば是れ和すべしと言ふと同一也、滿洲撤兵は必ず期すべしと言ふは必ず戰ふべしと言ふに等し是れ初より日本政府の當さに覺悟したるべき所也。

第五、然るに戰はざ二三箇月の前に於いてすべく、一日の遷延は一日日本の不利となるべきこと何人も異議なかるべし。

第六、日本は不利の途に就いて遷延彌久を敢てし來たれり。

第七、或は是れ歐洲に對する好戰の訕を恐れたるなりといへど斯の如きは美なるべきも愚なる策なり、今日國際の間は猶多く原始社會の狀態を離れず個人の道德と事情を異にするものあるを忘る可からず。

第八、以上の理によりて日本は結局平和に到るの途を歩めるものと断す即ち交譲によりて滿洲を露の勢力下に置くを許し他一切の條件を日本の提案に同意せしむ。

第九、途すでに斯くの如くなる以上は到達する所また必ず斯くの如くならざるべからず若し日本にして途と違する所とを矛盾せしむ

るが如きことあらば吾人は其の結果を豫想して、一片の憂なき能はず。

第十即ち断じて以爲へらく日本は和すべし戦ふべからずと。

以上は勿論今日にありて露と戦ふは日本に取りて非常の冒險且難戦なるべしとの根底を有しての見に候へど是は歐洲人に取りては無理ならぬ事にて日本の力をば認めながらも尙心の底には露の強力に對してはその惧無きを得ず我等邦人の心より申さば何時戦ふも我れに悔なことも申したけれど事實は唯時をして語らしむるの外なく候。

此の地の新聞にても稀れに日本の爲に悪聲をなすもの無きに非ず勿論多くは好意よりするの苦言なるべければ我等は是れをも喜んで聞くべく候先頃の「ベルメルガゼット」は日本の朝鮮經營の亂暴な

りしことを責めて日本人の來たる所逆まに美風は敗れ幸福は殺がる何所に一つ日本の勢力の爲に朝鮮みづからの經營よりも一層文明の福利を増進せりと見ゆる點ありや朝鮮を費して日本に利すといふ外日本は遂に朝鮮扶掖の理由を失ふに至らんを恐ると論じ候又同じ文には之れより延いて日本人は西歐文明を研究したりといへど我等歐洲文明の精神たるレファインメントの眞味何所にあらはれたりや日本の政治家などいふものゝ品性に見るも能く我等の紳士社會に伍せしむべきもの幾人ありやといふが如き言をなし居り候。

また日外の「デーリーニクス」に近頃まで日本の海軍兵學校とかの教師なりきとか申すノーマン君とか申すが我が陸軍の缺點を論じて、全體に日本人の體力の小さきこと騎兵の極めて粗なることなど重な

る弱所なりと論じ候外、重大の一點として、萬一日本が戦ひ敗るゝことあらば、下層と上層との反目、藩閥と閥外との軋轢、士族の餘流などよりして、内亂の起る憂なきか、此は恐らく日本人みづからも、其の期に臨まざれば、夢想だもせざるべけれど、是れ實に恐るべき禍根なりと申居り候、如何候べきか。

芝居などにて、大きな熊めが、いとしい日本を引つくはへい、や引つくはへやうとて、さうさせやうか、ジョンブルがついて居ると申すやうなる歌を聞き申候早々。

(明治三十七年二月四日稿、讀賣新聞)

英國で見る日本

○丁度開戦前兩三日までの此の地の模様一斑は、去る頃の『讀賣新聞』に書いたれば、茲には直ぐ其の後からの見聞をしるす。

○こまかい事に涉る前に、當英國全體の人氣を言へば、此のたびの大戦が多數の人の注意を惹いてゐることは、南亞戦争の時にも劣らぬと言つてよい。殆んど英國みづから戦つてゐるやうである。随つて其の一勝一敗、根も無き善悪の流説までが、其の日々の人心に影響する趣は、ちやうど、日々の陰晴が風雨計に感觸する如くである。新聞紙などの神經の過敏になつてゐること、驚くの外はない。

○開戦以來の経過を顧みるに、此の人心の晴れつ曇りつする次第が餘程おもしろい。蓋し最近の歐羅巴で、我が日本を眞に知つて呉れやうとし、また知つたと信じてゐる國はいふまでもなく英國であるが、それですら、歐羅巴の最大最強國の一なる露西亞と比べて何うだと言はるれば、頗る返答に躊躇する。是れは誠に無理ならぬ次第であらう。則ち表面如何に日本の肩は持つても、どうも心の奥には露

西亞が強いからといふ感が抜き去り難い、此の感から、日々、の天気は晴れたり曇ったりする。而して兎角戦報などがとぎれると忽ち此の感が強くなつて、人心がグルーミー(陰鬱)になる。少しでも之れを散らすやうな報道があれば随つて世間が冴え冴えする。日本でならば勝てば勿論喜ぶ、負けと聞かない限りは、息を殺して結果を待つといふのが人情であるが、英國人から見ると、勝ちと聞かない限りは、凡ての事が兎角日本の負けのやうに思はれて、危険でならぬ心配でならぬ、即ち一寸戦地の模様が変わらなくなると忽ち例の露西亞は「大國」といふ黒雲がむら／＼と湧き上がつて来る、人氣が陰鬱になつて来る。其所へ具合よく日軍勝利の吉報などが来ると、忽ちからりと晴れて、一時夕立の後のやうになる。併しそれが二三日も續くうち、跡が途ざれると、忽ちまた例の黒雲が、そろ／＼と、のしあげて来る。

そこへまた吉報が来る、晴れる、とぎれる、曇る、といふのが今までの状況であつた。

○されば愈々戦争と定まつた當時は、勿論陰氣で、人道論者平和論者ならぬものでも、大抵の人、殊に婦人などが我々日本人に對しての挨拶は「アイ、アム、ソーリー」お氣の毒さまといふのであつた。細君が何とかね、戦争にならないで納まる法は無かつたのでせうかといへば、主人は分別ありげの調子でも仕方がありますかい。二つのパワース(強國)が兩方から同じ方向に廣がらうとしてゐるのだもの、衝突するより外、どうなるものですかといふものもあつた。

○それが旅順仁川の捷報で、人心を一時狂喜の度にまで沸騰せしめ、やがてまた沈みまた昂りして今日に及んだ。此の通信を書いてゐる今五月十二日は、恰も鴨綠江の大勝、遼東半島の上陸、旅順の閉塞、及

包圍牛莊の露兵撤退の噂等で、大景氣であつた跡、例の心理的反動が
と氣づかつてゐる。矢先へ昨日あたりから、旅順の鐵道再び通じたり
との報道に引きつゞいて、色々不安の噂が湧いて來て、再び人心の晴
雨計の沈みかけてゐる際である。

○もつとも今度の心配は、少し今までのよりも調子が違つてゐるか
と思はれる。始めは海陸ともに露西亞を非常の強敵と積つてゐた
のが、先づ海戦だけではと、片安心になつて、次が陸戦の心配となつた。
其の心配が餘程久しいあひだ續いて、殊に鴨綠江の戦のあるまでと
いふもの、殆んど世間は氣疲れして、最早日本はとて、露西亞の陸軍
に面と向かふ勇氣は無いのであらう、朝鮮を守るので満足してゐる
のではないか、とまで人をしてつぶやかした。是れは例の露西亞
は陸軍の國といふ先入見から來る危懼であつた。然るに決戦の

果はあの通りの始末であるから、是れでまた露の陸軍といふ心配は
半ば崩れて、此の後の陸戦は、少なくとも五分々々の戦場否日本が分
がよさうだといふことになつた。唯今一つこゝに残つてゐる此
方の人の疑團は、クロバトキンといふ名將に對しては何うあらうか
といふ事である。是れも此の通信の日本に達する頃は既に昔の事
となつてゐるであらうが、目下の晴雨計は、此の低氣壓に觸れてゐる。
是れが即ち以前の曇り具合と違つてゐるといふ所以である。
○其の他、今少し奥の方には、露西亞は人數で勝ちはすまいか、經濟で
勝ちはすまいか、根氣で勝ちはすまいかといふやうな心配も普通に
存してゐる。此等の點は、所詮結局に近づくまで、打ちやつて置く外
に仕方はあるまい。海で止めを刺せば、陸ではと心配し、陸で勝てば、
「クロバトキンにはと案じる。其のうちクロバトキンの軍を破れば

でも新手を加へたら露西亞は頭數が多いからといふ。さう自在に頭數ばかり送り出せるものでないとなれば、それなら若し露西亞が遠く引込んで降りもせず急に出もしなかつたら何うするといふ。是れでは際限がない。或は實際斯やうな事の出来得るものかも知れぬが、そこは我が國の其れ専門の人に成算あること、我々日本人は信頼してゐる。唯しかし斯やうな信頼の出来ぬ外國人に取つては、此の心配は當然であらう。随つて前言つたやうな好意の人に對しては、其の心根は有りがたい。それと同時に、プロシアン即ち露西亞黨の人々が日本を嚇し英國に水をさふんとする時の言ひ草も是れである。此の言ひ草の存してゐる限り、日本は勝つてもく、けちを附けられる恐れがある。つまり一方に日本の大勝利を祝ぶ聲の中にも、何所か一點不安の濁りがさしてゐるといふのが、此の國に

於ける眞實の人心であらう。

○書生などで今回の戦争に注意してゐる者等が折々いろいろの事を聞く中には、屹度右の二問すなはち頭數でしうねく來たら遠く退いて幾年でも和を入れぬといつたらといふ箇條がある。

○或時二人の書生が僕の寓所で、此の點から英國政府の政策について盛んに議論をやつた。即ち彼等の常識では、すぐ英國の仲裁といふことに思ひ及ぶ。大抵の所で英國が口を挿み露をして和を納れしめるといふのである。併し一方は是れを以てあり得べからず、また爲すべからざることとして以爲へらく、それでは露國に取つては、英國が手を日本に貸して露國の敗を全くせしむるものとより外思はれまい。随つて必ず聴くまい。達つて聴かせやうとすれば戦争になる、世界中の戦争になるから、そんな事は断じて出来ないと、いふ

のであつた。僕はそれを取り鎮めて第一露西亞に尋んな事が出来るか出来ぬか問題であるし、出来るとしても此方ではまた支那滿洲を利用して持久の策を立てるとか、ウラジオストク邊から進んで取り押へにかゝるとか、そこは幾らも日本の政府に計畫があらうから安心したまへと言つて置いた。以て人心の一斑が押し測られる。

○戦捷の第一報が倫敦についた時の模様は目撃しなかつたが、當オクスフォードでは二月九日火曜の午後すでに露艦三艘沈めりとの報がばつとじてゐた。此の地の夕刊新聞もあるが、多く大學に關係ある人は、ユニオンといふ會の俱樂部に取り寄せて電報で承知する。右の報も第一に是れから廣まり、つゞいて倫敦からも夕刊新聞が來、當地の夕刊新聞にも出たのである。

○僕等當地在留の日本人三四人は、この日ちやうど或る寄宿舎の友人の催せる茶會で落ち合つた。其の時一人が途すがらの斬髮店で鬚を剃つてゐると、あはたどしく飛び込んだ一人の男が、餘程興奮の態で、主人に軍艦三艘沈没の噂をしてゐた。併し友人はたゞちらと聞いた許りであるから、何所の軍艦であるかは分からぬとの話に、始めて開戦の事を知ると共に、吉凶いづれなりしかと言ふべからざる待遠しさを感じた。其のうちにもまた他の一友が一葉の夕刊新聞をポケットにしながらいつて來た。常人はまた何も知らないから、それと右の新聞を引き出さすや否、其の留置欄を見ると、露艦三艘日本の水雷のために沈められたりとの電報が載つてゐる。ほつと息づいて、覺えず萬歳と呼びかほしたのは、四時少し前であつた。

○つゞいて這入つて來た亞米利加の男に之れを話すと、此の男は大

分年嵩であるだけ肩をこはめつくくと右の新聞を見てゐたが夕刊新聞の記事であるから浮とは信じられぬと考へ込んでゐた。其のあとに來た若い男に話すと是れは飛び上がるやうにしてさうか本當に？そいつは目出たいと握手を求めた。茶の後僕は或る講義を聴きに行つたが歸りには其處の門番が威勢よく駆け寄つて日本海軍が露西亞の軍艦を沈めましたとさも嬉しさうに他の夕刊新聞を差しつけた。

○さて翌十日の新聞は露西亞の公報を掲げて事の真相が世間に知れると共に到る處たゞ此の噂ならぬは無き様となつた。朝鐵道馬車に乗つてゐると商店か何かへの勤め人と見える五十恰好の男が外套の襟を高くした間から白い息を吹きながら飛び込んで來て腰を下すや否向ふ側にゐた同じ風體の男にや、お早う。何うです！日

本がやりますせ。ゑゝゝといふ調子。

○開戦後の新聞には日々流説百端例の上海あたりから來る電報には随分思ひ切つたのもある。併し最も盛んに日本の不利な噂を出すのはセントピーターズバーグで確報の切れ目前言つた晴雨計の曇りになりかゝる頃を見計らつてはあらゆる言いがかりを捉らへ、あらゆる實らしい嘘を拵らへて蜚語を放つ日本の名譽を傷けやうとする、日本に向かふ人氣を腐らせやうとする。若しこんな事も外交といふものゝ一部なら露西亞の外交はゑらいのかも知れぬ。

○露西亞の口先政略に對照して日本は不言實行主義だとはまづ一般に認められてゐるらしい。殊に其の軍略方面に於いては日本の秘密策といふことは一の驚嘆となつてゐる。唯しかしそれが必ずしも軍機に關しない所まで行き過ぎはせぬかといふ批難が一部に

ある。

オーヴリー、レチセンス(無用の隠し立て)といふ批難が聞こえる。現に當國の某日本通の如きは、僕に書を寄せて、餘り報道の出し吝みをする、それが爲め却つて何か其の裏に非常の不幸が横はつてゐるのでは無いかと、一時たりとも人心に不安を與へる、其の結果は限々のうち恐るべきものとなりはしまいか。且つ外國に對しては、何だか水臭いといふ感じ、いやな振舞といふ感じから、其の同感を冷却せしむる傾きがある、といつて來た。

○新聞なぞでも、一方に十分日本が秘密を費ふ所以を諒として、日本は何も見物に觀せるため戦争をしてゐるのでは無い、非常の大國に對して生死の勝負をしてゐるのであるから、とは言つてゐながら、他方には何となく、餘り隠されると氣まづいといふ口吻が時々見える。

我等の素人考から言つても、一方に大いに隠すと共に、他方に大いに打ち明けた所を見せるのが、政略としても賢い遣り口のやうに思はれるが、ごんなものか。殊に英米人のやうな、獨逸露西亞などと違つて、何でも衆と共にするといふ主義の國民を相手にしては、一層此の注意が必要かと思はれる。

○從來歐羅巴のものが、東洋人—亞細亞人—未開人といふ勝手な評價から、東洋人の悪特性として數へるもの、陰險狡猾醜陋卑屈といふやうな箇條が最も普通で、オリエンタル、ツリーチエリー(東洋的奸慝)オリエンタル、クルエルチー(東洋的殘忍)オリエンタル、サーギリチー(東洋的奴隸心)といふ語は、種々の場合に用ひられてゐる。而して其の標本は支那人と見られ、非常の輕侮を受けてゐる。日本人が罕に貧民町などで小供に跡から囃されなどするのは、大抵この支那人と見

られるからで、彼の「ゲイシャ」と題する芝居に使つてある「チン、チャン、チャイナマン」といふ唄を唄ふ。此の唄は三ツ子でも知つてゐる。つまり従來の日本人は支那人と不名譽を分かつてゐた。日清戦争以來、一部の人には、日本といふ國の支那と別であることが分かつたけれど、今回の戦争までは到底普通一般に我が國の地位を認められることは出来なかつた。現に僕など、日本は何時から獨立したかなどいふ間に屢々接した。

○そこで今回の戦争以來、露西亞及び露黨のもの等が種々の口實で日本の國民性に疵をつけんとする場合には、右の東洋的悪特性に照合する。何か言ひ係りを捉らへては、是れだから矢張り東洋未開の人は仕方が無い、といふやうな筆法を用ふる、夫の露西亞の公文が日本の水雷夜襲を呼んで、ツリーチェラス、アックク(奸黠なる襲撃、ツリー

チェラス、フオー(奸黠なる敵)と卑怯な言ひが、とりをつけたのも、即ち右の理由に基つたのである。當時英國の新聞紙が如何に此のツリーチェラスといふ一語を氣にして、之れが反駁に全力を盡したかを見れば、此の語が英國人の神經に觸れた鋭さが分かる、此れに味を占めた露西亞は、其の後機會さへあれば、此の語を繰りかへす、英國の新聞また其のたび毎に之れを反駁する。斯くして此の語は一種の流行語になつた。勿論露黨にあらざる限り、誰れも眞面目に斯んな訴訟に同意するものは無いから、此の語も多く嘲弄の場合に用ひられる。○右の外、今回の戦争以來出来た流行語は數あるが、夫の第一回旅順口閉塞の際、我が石舟を軍艦と間違へた有名な露報の中に、レットウキザン艦であつたかど、傷いてゐながら、右の海戦に功をしたといふので、レットウキザンは光榮をもて自らを飾れり、といふ句があつた。然

るに其の沈めた舟は沈まんが爲に來た石舟であつたと知れてより、此の光榮をもて自らを飾れりといふ句は、色々の場合に滑稽の材料として使はれる。其の他普通の論文などに戦争上の言葉の用ひられるのも時節柄の流行である。ボンバードメント(砲撃)プロクレーデング(港灣封鎖)ポットリング、アップ(港口に栓をする)リユアリング、オーヴー、マイン、フールド(水雷區域に誘ふ)等が其の例である。

○誰れしも外國人の名の長いのは覺えにくいものであるが、今度の日本の將軍には短い名の人が多いので記憶し易いと言つてゐる。東郷瓜生黒木與など皆さうである。殊に東郷といふ名は英語に綴つて、ツー、ゴー即ち行くといふ意であるため、色々の地口の種子にもなつてゐる。「東郷司令官はなせ勝つか、ツー、ゴー司令官進行司令官」だからさといふやうな謎もある。

○今までの我が戦跡の、あまりに花々しいので、世間一般の態度は、褒める喜ぶといふよりも驚嘆に近づいてゐる。新聞紙などは、あらゆる激賞の言葉を用ひ盡くして、最早言ふことが無いといふ氣味である。蓋し英國が日本の戦捷を自分の事のやうにして喜ぶといふには、政治上の外、いろいろの意味があらう。例へば海軍が勝つたといへば、其の海軍は自國を模範としたもので、自國海軍の勝れてゐるのを證するに當たること。自分の弟子の手柄をするやうなものであること。また陸軍が勝つたと言へば、お前が海軍で世界一なら、おれは陸軍で世界一だと角つきあひでゐた露西亞が其の世界一といふ估券を失ふこと。また今まで日英同盟を、旦那が下女の手でも引いてあるくかのやうに笑つてゐた大陸諸國に對し、同盟國の賊に立派なものであつたことを示して面を起こすといふこと。此等は隠さ

んとしても隠されざる英國人の喜悅の源であらう。

○日本兵の全く死を恐れざる勇氣は、西洋の人をして殆んど不思議の念を起さざる様であるが、其の紀律を維持する力、軍略の精妙等は、延いて日本人の腦力の從來普通に解せられてゐたよりも遙に秀拔であることを證據立てたものゝ如く、また其の武器、火藥等の發明によつて、更らに日本人は單なる模倣者、應用者たるに止まらず、發明創作の力に於いても、歐米に何の遜色あるものならずといふことが一般に認められんとしてゐる。

○されば今回の戦争は種々の方面からして、歐米人をして日本を知らんとするの念を一層切ならしむるの結果となる。精神上にも何か新しい非常なものを此の不思議な東洋の島國から見出ださうといふ豫期となる。是れが我が國の自覺と相待つて、將來の我が國を

あらゆる方面から向上せしむるの縁となることは疑ひあるまい。

○めでたく此の戦争に勝ち了すれば、其れが爲め我が國民的自覺を呼び起こすの大なること、日清戦争の比ではあるまいが、それと共に、シンゴイズムの増上慢も、恐るべき弊であらうとは、此の國の人々が心配する所と見える。敵黨の胡つてゐる隙も、此の邊にあるらしい。先頃倫敦で日本の柔術家の谷君とかいふのが、英國で有名な角力家の某と賭の大勝負を試み、見事に勝つて、世界で何人といふチャンピオンになつたが、時節柄ではあり、日本の柔術といふものは、疾くから西洋人間に評判のものであるため、何れの新聞もこのたびの戦争に因みを持たせて盛んに書き立てた。中に某新聞は、其の記事の末に斯ういふ事を附加した、自國のチャピオンが負けたのに對し、勝つた方の日本人を見物が狂氣のやうになつて、あれ程までに喝采するとい

ふことは此の英國人より外出来ない業であらう。それを何ぞや、おれの勝つのは初手から分かつてゐるとでもいふ風に、ろく／＼頭も下げなかつた。是れは勿論此の國で凡ての演技者が公衆の喝采を受納する方式から言つたので、事實も針小棒大の中傷なることは明らかであるが、つまり何かに寄せて日本にけちをつけんとする露黨の筆法など思ひ比べて、谷君の人氣を毒せんとする此の讒誣が時節柄ちよつと注意を惹いた。

○英國新聞の外國に對する開戦以來の調子を顧みるに、初めは随分思ひ切つて露西亞の負け方などを嘲罵し、併せて其の同盟國たる佛蘭西にも、とばしりを及ぼす氣味であつたが、段々時局の進むと共に國際の神經が過敏になるにつれ、戦渦が歐洲にまで廣がりはずまいかといふ恐れから、佛と英との仲は申し合せたやうに調子がおとな

しくなり、續いて夫の埃及事件の條約など取り結ばれるに及び、茲に全く此の兩國だけは綺麗事を言ひ合ふ關係となり、互に痛い物に障るやうな態度で、所謂歐洲平和の擔保者といふ地位を持ち固めてゐる。

○露西亞に對する英國民の態度も始めは右の如く烈しかつたが、中程から一二度變つた。其の理由は微妙な國際上の事であるから、斷言は出来ぬが、我等門外からの見によると、露西亞が當初こそ鬼百合の天日に傲る勢ひで強がつてゐたが、段々不幸の續いたため、心細く感じて英國に對し幾らかじほらしくなつて來たのが一理由であらう。日本に傷けられた口惜みの毒炎をおとなしい英國の上、に吹きかけ／＼して、自から慰めてゐた露國が、夫の仁川負傷者保護の禮などを、きツかけに、哀訴的調和的の氣配を見せはじめた。さうなると英國

人の事であるからぐッと料簡して此方も無用の喧嘩は賣らぬ。而して此の傾向の頂上は、一時盛んであつた英露接近の噂となり英皇仲裁の噂となつた。尤も英皇仲裁の噂については、獨逸が拵へたのだとか露國鼠負の二三の英國政治家が目論だのだとか種々説はあれど兎に角之れが右の傾向に關連して世に行はれてゐたことは明かである。然るに何ういふ動機からか露國は過般かの激烈な通牒を發して如何なる事情ありとも日露事件に第三國の容喙は許さぬと斷言した。是れが英國の一派には少からぬ不快の感を與へて引きつゞき鴨綠江の大敗以後露國を譏る調子が跡もごりの様子である。○最近はまだ更らに日露の接近といふことが稍々人の注意を惹きかけてゐる。古來戦争は國と國とを敵對せしめずして却つて相親しましむる縁となつてゐる。日露の間も近時露國が漸く日本を知

つて來ると共に、一種の通路が開けかゝつて來た。戦後の日露は却つて同盟しはすまかといふやうな豫測を下すものもある。

○英國とても場合によつては露國と近づくのはたやすいやうに見える。英國が目下最も遠ざかつてゐるのは獨逸であらう。此の兩國民は妙に仲が悪い。併し外交などいふものは門外の我等から見れば丸で娘ツ子のせり合ひを見たやうなものだ。何時どんな變が起こるか分かつたものでは無い。

○開戦後の露黨の立ち場は専ら白人と黄人との争ひといふ點に存してゐる。歐洲國中の歐洲國たる此の佛蘭西などが何で黄人などの肩を持てるものかといふやうな事を放言してゐるのは佛である。彼等が英國に對して皮肉をいふのも此の筆法である。英國をして、白人中の裏切り者、いち悪者といふ地位に立たしめ、みづから顧みて

さまりわるくいや氣のさすやうな境遇に陥いらしめんとするのが、
敵黨の手であらう。併し英國人みづからは文明進歩の身方が常に
自分等の身方で黄色白色といふ如き感情ばかりでは自分等を動か
すに足らぬと言つてゐる。

○たゞ併し支那が目を醒まし印度が目を醒まして其所の英領が危
くなるといふやうな事があつたら何うすると問はれると彼等の心
の底に一種言ふべからざる矛盾を感じずる即ち今日英國の政治問題
の中央點たる殖民地政策に感觸する來るから彼等は成るべく之れ
を論ずることをすら避けんとする。要するに黄禍といふ中に此の
一點だに含まれてゐなかつたならば英國人が容易に黄禍説に動か
される恐れはあるまい。

○英國人が露西亞を批難する中には普通露の滿洲撤兵に關する食
言滿洲を世界の商業より封鎖せんとする不都合等の外露國の政體
其のものに對する厭惡が一つの理由となつてゐる。是れは露國の
膨脹的野心其のものを根本からは認せんとする一派の論に對して、
彼等の主張する所である此の露國の野心すなはち強大の國が弱小
の隣地に膨脹するのは歴史の發展上まことに已むを得ぬことで露
國が不凍港を亞細亞海岸に求めに出たのは當然であるといふ議論
は、じばく耳にする。

○ユニオンと言つて當牛津大學の書生教職員など相寄つて組織
してゐる政治上の討論會がある。古來有名の政治家に茲で腕をね
つた者も多いが。さる第一海戦のすぐ後露西亞の東洋政策は是認
すべしといふ動議が此の會に提出せられた。時が時であるから結
果は勿論百票に對する二十幾票といふ相違で否定の方が勝ちを制

したれど、是認黨の重なる理由は右の當然の野心といふことで、それなら日本も當然の野心で之れを拒ぎ止めるのだといふと併し露西亞は文明擴張のために其の權利を有してゐるが日本はさうでないといふことで双方とも随分皮肉なことを言つて、日本と露西亞との悪口競をしたが、結局露西亞の膨脹はやがてオートクラシー(專制政治)ビエーロクラシー(官僚政治)の膨脹であるから、英國人は之れを文明の擴張として同感することは出来ぬといふに歸した。是れ蓋し一般の世論を代表したものであらう。

○保守黨が日本最負で自由黨が露西亞最負と一概には決して言へぬが、たゞ目下此の國での重だつた露西亞最負の個人や新聞は多く自由黨側であるとはいへる。普通の社會では色々複雑の感情や干係からして、日本最負ともなれば露國最負ともなる。但し數の上か

ら言つて、非日本の傾向を持つたものゝ遙かに少ないことは明かである、社交の間などでも、それと見える人に逢ふことは極めて稀れである。(勿論たまには日本人と見てお世辭に本性を隠してゐるものもあらうが)。海戦のはじめ頃、さる茶會の席で、日本の戦捷の噂が出ると、一人の中年増の婦人が、陸戦はさうは行きますまいよと言つてツンとした。恐らく此れなどが優しいプロ、ルシヤンの例であらう。それかと思ふと、一方では宅ではあの晩父の發議で日本のために祝杯を挙げましたなど話してゐる娘もあつた。

○政客で有名な露國黨は、評論之評論主筆ウリアム、トーマス、ステッド及び國會議員のヘンリー、ノーマン、此の二人は共に今回も露帝に謁見などして、平和會議とか英皇の干渉とか色々の目論見をやつてゐた。兩人とも現政府反對側で、以前ヘル、メル、ガゼット、デーリー、ク

ロニクル等自由黨の新聞に關係してゐたことなども似てゐる。南亞戦争の時はツランスワールに同感してプロボア即ちボア最負の賞を得、今回は露國に同感してプロルシヤンの稱を得た。而して今や更らに西藏に同感するプロラマといふ名が生せんとしてゐる。是れも同じ傾向の人々に屬する。勿論其れが一貫の主義信仰であるならば是非の斷はおのづから或る他の標準に待つべきであらうが保守黨側の固い家などでは如何なる場合にも自國の敵に組せよといふのが此の派の人の信條であらうと、苦い顔をする。問題は動機に歸することだ。

○英國の新聞で目下最も著しく露臭を帯びてゐるのは、朝刊で「モーニング・リーダー」夕刊で「ベル、メル、カゼット」次ぎに政見上といふよりは、むしろ廣く平和を貴んで戦亂そのものを惡むといふ態度で其の

實偏狹な見解から折々日本に冷たい手を觸れるのは「デイリー・ニュース」、また「デイリー・クロニクル」は近來調子が日本に近くなつて來たが、まだ何ちらとも言へない。尤も是等は却つて公平なのかも知れぬ。而して以上は何れも現政府反對の自由黨側である。序にいふが右の「ニュース」と「クロニクル」とはつい近頃紙幅を縮めて一片賣を半片に値下げした。日露事件から離れていへば「ニュース」は稍文學新聞の氣味で「クロニクル」はしまつた新聞である。

○倫敦の大新聞は「タイムス」の三片及び他の一片(四錢位)の新聞である。併し前言つた「ニュース」と「クロニクル」との値下げのため「タイムス」は言ふに及ばず、目下の一片新聞は残らず政府方で日本最負である。「デイリー・テレグラフ」は中でも殊に際立つた日本黨で、先頃死んだサー・エドウィン・アーノードも此の新聞に關係してゐた。方面は猶

太人及び廣く實業界に行きわたる新聞である。此の社の戦争通信員で今東京にゐるパーレー君といふのは最も當地で評判のよい人である。また『モーニングポスト』は上流社會に廣く讀まれる新聞で、是れには戦争評論記者として高評のツルキンソン君といふのがゐる。日本人の意見をも日々載せてゐる。『スタンダード』は中流の讀者を多く持つてゐて、他の保守黨新聞に比して、公平といふことを稍餘計に持たんとしてゐるらしい。随つて活氣が少なく不平をいふ讀者もある。無論戦争に關して日本の爲に盡くす。以上が一片の大新聞である。また『タイムズ』には無線電信の黃海通信が出て、評判である。

○半片新聞では保守派の『デイリーメール』折々浮と信じられぬ種子もあるといふ話だが併し一方に非常に機敏な所のある且つ面白み

のある新聞である。社會の下層から中層にかけてひろく行きわたる或る人がこの『メール』を評して大底の人がセンチシナル(刺戟的)だと惡くいふが併し大抵の人が讀んでゐるといッたのは蓋し適評であらう。今戰地にゐるマツケンジー君といふ此の社の通信員はなかく敏腕との世評である。夫の仁川沖で英艦長が他の佛伊艦長と連署して瓜生氏の露艦處分に威嚇がましい抗議を申込んだといふ噂を論説で評して事實なら同盟國たる日本に氣の毒であるから右の艦長を取調べて是非を明かにすべしと論じたのは此の新聞一つしかない。論の當否は知らずとするも、こゝまで肩を入れてゐることが分かる。次には『デイリーエクスプレス』是れは『メール』と兄弟の如き體裁を具へておのづから競争してゐる。政見は反對であるが日本に力を入れることは同じである。是れに前言つた露西

亞最負の『モーニングリーダー』を加へて、半片新聞の三幅對と見てよ

い。
○日本軍の爲めに歌ふものは無いか、キプリングは何うしてゐる、なごいふものもあるが、また文學といふほどのものに此の戦争のはいつたのは見受けぬ、但し通俗雑誌の續物小説などには屢々之れを見る、其のほか單に日本に關した記事、繪畫等が種々の雑誌類に出でゐることは夥しい。殆んど如何なる雑誌にも一つ二つづゝ此の類のものゝ載つてゐぬことは無い。例のドーグラス、スレーズン君などいふ、恐縮の日本通なども、なかなかの流行つ兒になつた。書葉書にも日露事件のボンチ畫藝妓の化粧文身を見せた裸躍、アイヌ風俗等より將校政治家の肖像に至るまで、さまざまのが出来た。日露戦争記の定期刊行も二三種ある。各種の畫報雑誌は大半戦争で持ち切

つてゐる。日本に關した書物が再版になつて新たに店頭を并ぶ。錦畫張などの華手な日本の日傘を若い美しい女が盛んにさす。夕刊新聞のびらに『旅順陥落』と大きく書いて下に小さく『昨を書けば、目たゞく間に其の新聞が賣り切れてしまふ。夫の日本軍艦四艘旅順沖に沈没』と夜間に呼んでゐるいた時などは騒ぎであつた。
○終りに臨んで日本の軍器をナポレオンに近づくと激賞し、今回の戦争を新國民の將さに興らんとする歴史上の壯觀なりとするたぐひ、皆以て自家が反省の料となるのは言ふまでもないが、他に精神的にも自家を知るに足るべき反射をしばゝ此等の通信員や記者が我等の上に投げかける。たとへば通信員の或者が日本に来て第一に感じたのは日本人の性格の不思議といふこと。尤も東洋人の性は西洋人には解すべからずとは前から言ふことであるが、是れは

疑ひも無く感情を隠す場合多きを特長とする東洋道徳の表面に觸れたものである。苦しいときに笑ふ若し其の一重奥にある綜合點を掴むことが出来なかつたら日本人の性格は凡て矛盾とも見えやう。日本人不可解説は此の矛盾點まで達した見かたである我等は何で此の矛盾を綜合してゐるか。また或る者は日本人の性格に於いて甚しいエーションシメント(古代)とモダーン(近世)との結合を見るときふ。或は中世のロマンチック(小説的)と現代のプロゼイック(平板的)とが不思議に共同してゐるといふ。日本人の前には歴史といふことが無くなるやうに感ずる。役に火を點して水雷艇が曳いて行くといふことは西洋人の頭には美しい矛盾である。日本人はたしかに斯かる矛盾性をも有してゐる。元來我等日本人が平生から行つてゐること考へてゐることを總括したら何といふ言葉になるであらう

か。是れが疑問だ。

(明治三十七年五月十二日稿)

凱歌

冒頭第一に申上置候此の手紙は適宜紙上に御出し被下候て差支無之候。

さて小劍兄足下先般は日本繪葉書の見本とも申すべきものゝ由御惠贈を辱うし多謝本場の獨逸にても繪葉書の意匠は目下ちよつと種子切と申して宜しかるべく候是れ一つは餘りに多く出過ぎて最早何れを見ても目馴れて面白からぬが故にも候べし日本も繪葉書流行と申せば今年の正月あたりは例の恭賀新年に住所姓名のみを黒々と活字にて植ゑ込みたる智慧の無き無用無趣味の葉書の取り遣りは餘程減じ候事と察し上げ候。

此の地の事どもは行く例の新小説にて御意を得べく候來伯以來已に半年多少は材料も集り候へど歸期の漸く迫ると共に心忙しきことのみ多く候英國の事もまだあれ丈にては物足らずと申越す友人あり勿論にてあれ等は序にも足らず尙ほく大いに書く所存に候只當夏より中休み致し居るのみに候。

獨逸は感心なる國なれどいやな國たるを免れざるやうに候。

目下の戦争に關する獨逸の中下層の同感には日本に向かひ居れりとは此の國のもの自らも申す事に候へど是れは只俗に人氣ありと申す其れだけの意味に過ぎず候勿論事情も異なれど是れを英國人の同感と申すことと同一に見たらば大間違と存候併し兎も角も日本人々々と囃し立て候だけの範圍にて申さばそれも憎からぬ人情に候べし。

旅順陥落の報は何と申しても大變の騒ぎにて候ひき天下を震動せしむるとは先づあれらの事に候べし一月二日の正午には早や新聞紙の號外にて市中残らず此の噂さに埋もれ居り候ひき。

一月十日は旅順にも凱陣の宴ありと申すに此地在留の野田貞川名兼四郎鈴木梅太郎の諸君發起人となり同日城西サギニーブラツクの一亭に在伯林日本人有志者の祝賀會開かれ申候會する者四十人に垂んとして人々が中心より國の爲に歡喜するの情はおのづから其の會の模様に見はれ非常の盛況と見うけられ候一同陸海兩軍に送るべき賀表の末に署名したる後杯を擧げ萬歳を唱ふる等かたの如くありて終りに小島少佐の興味ある軍話あり會は散じ申候尙當日小生が席上吟唱の料にとて筆を走らせ候もの詩とも文とも申兼ね候へど小修を加へて一彙を博し候。

旅順陥落明吟歌

(上) 將軍之詞

夕陽に 馬を立てつゝ

あはれ瘦せたり

鬢に吹く風

三軍の 將士半ばは

眼を擧ぐれば

新塚廢山

嗚呼一萬の 子弟斃れて

此の城取つて

今ぞ報ゆる

月十日は

見かへれば

我が影の

痛ましく

傷つきて

西のかた

限り無し

旅順落つ

國のため

こゝろざし

許せかし

陣に宴の 凱歌の樂は

(下) 凱歌之樂

見よ東海の

民今興こる

八重の若潮

大風拂ふ

晴るゝや亞細亞の

朝日子昇る

夜もすがら 奏づとも

曙に

大八洲

湧きたちて

雲の色

群霧に

し

て

國あり二千 初めて今日の

五百年 歎びや

兵士は銃の
打つよ鼓の
將軍起つて
劍に風雨の

臺尻に
亂拍子
舞ふときは
響あり

嗚呼國興こる
君が御威を

東天の
ことほぎて
走るもの

山嶽北に
來つて茲に

ひれ伏せや
聲を揚げ

波濤歡呼の
天地とどろと

どよむ也

目下伯林の氣候攝氏零下を下ること往々八九度遙に滿洲の風雪を

思ひやり申候。

小生頑健貴兄並に諸君子の盛大を祈り上候不宣。

(明治三十八年一月十五日稿、讀賣新聞)

滯歐文談 終

明治三十九年七月廿六日印刷
明治三十九年七月廿五日發行

滑稽文談
定價金八十五錢

著者 島村瀧太郎

東京市日本橋區墨田丁日五番地

發行者 和田 心 次

東京市日本橋區兜町二番地

印刷者 金澤 求也

東京市日本橋區堀田丁日角

發行所 春陽堂

電話本局五十一番

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社

版權所有

行發日一回一月毎

新小説

錢五拾貳金價實

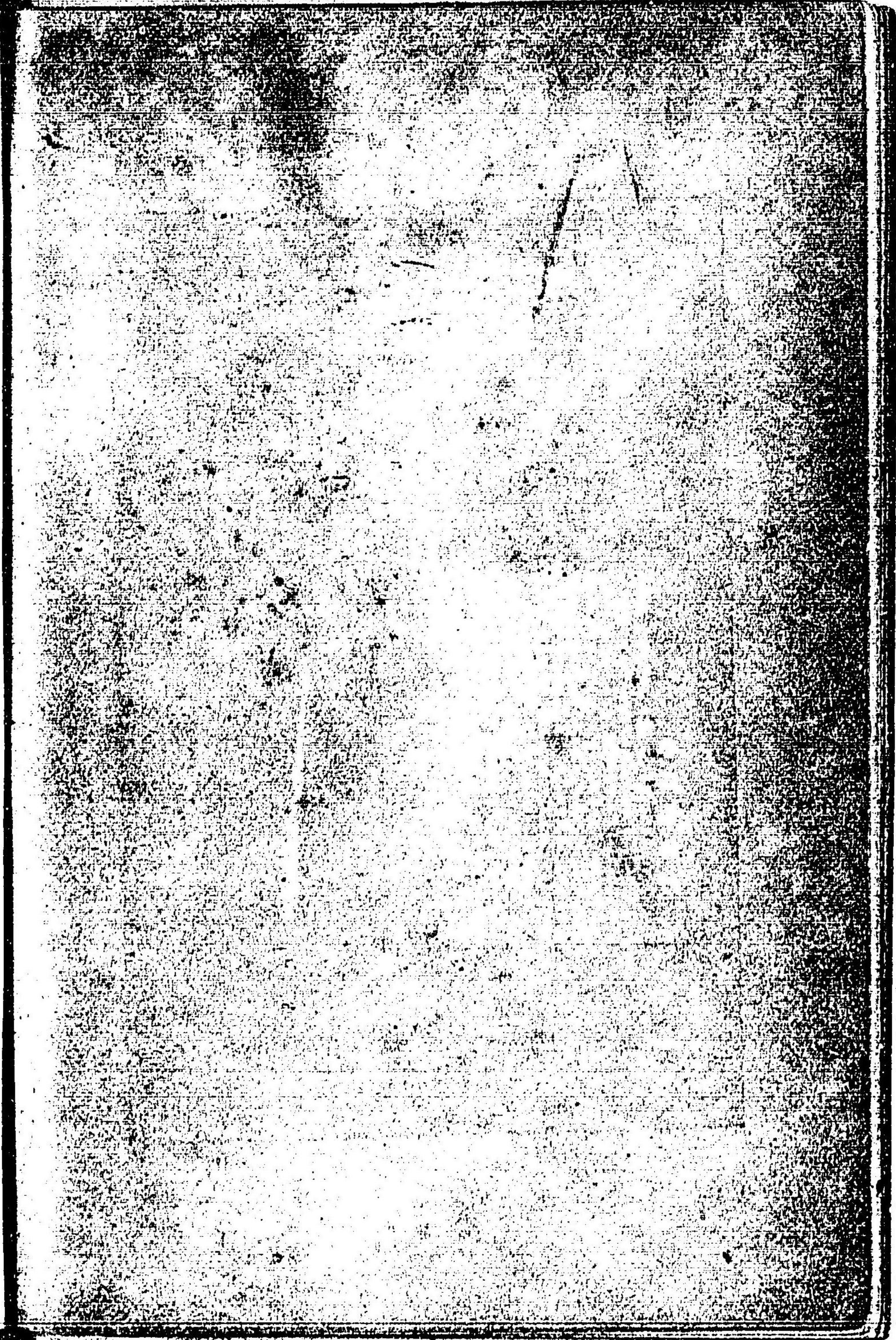
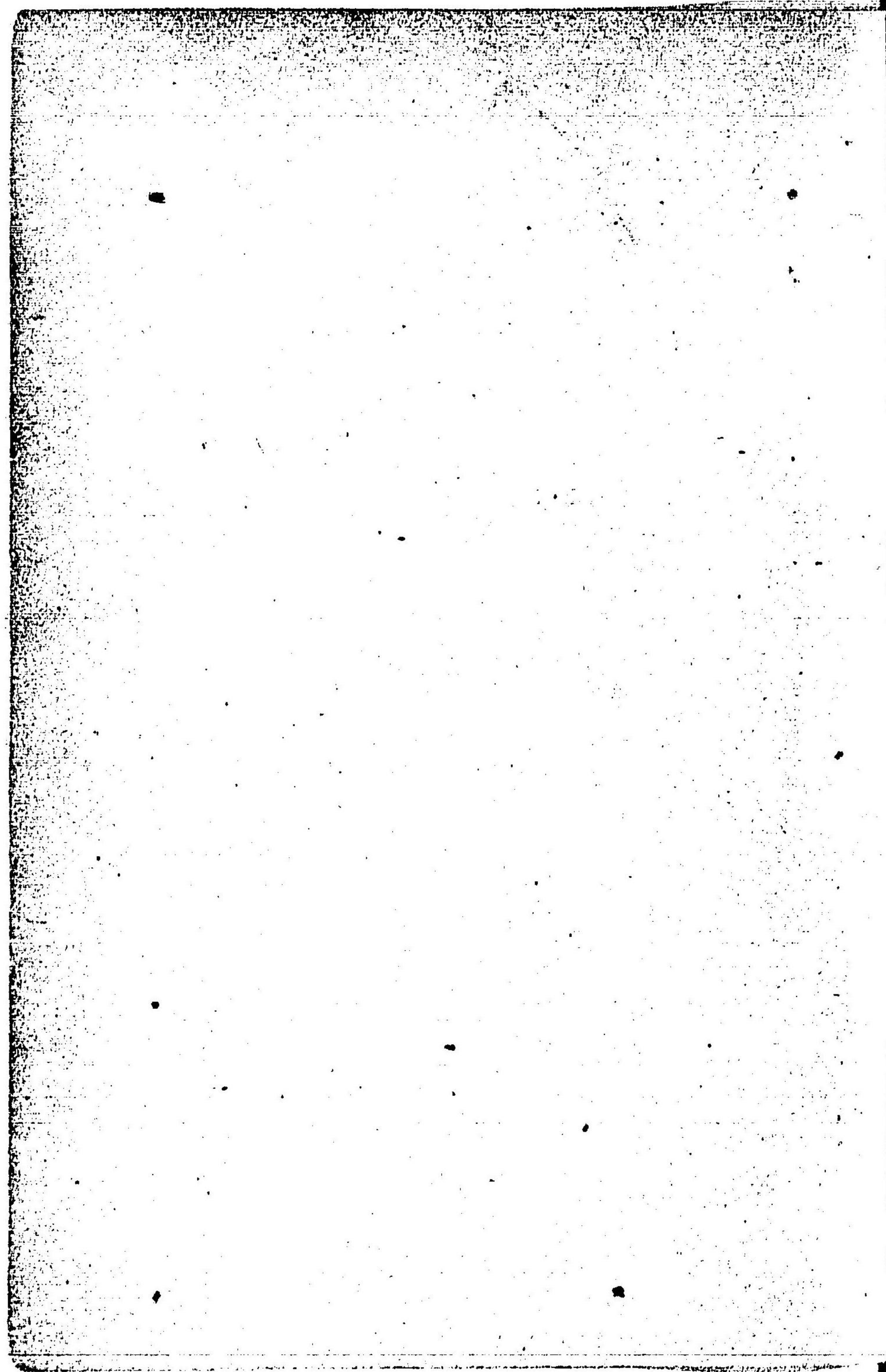
金とそれの關係を見たまはむほどの人、文學の發展、美
 術の進歩を知りたまはぬはなかるべし。もしそれらの出
 つる所に住むて、小説の所なるかゝるものを見るは、其
 にして察するもの難。新小説は故なる意味を以てして、
 文學の發展を期すなり。其の花は既に、一に開き、二つと
 見そむ時の僅しき、心の癒しき、世帯の癒しき、一つと
 してなきはあらず。然るに其の流るるは、山岳の高き
 を指ふ。何人が其の流るる、神土が不審の流るる、これに於
 くものあるべからず。月を以て其の流るるに於て、
 明き月を照らすなり。月、月、月、月、月、月、月、月、
 に照らすに於て、月光を以て、其の流るるに於て、
 らむ、世を照らす、月、月、月、月、月、月、月、月、
 春陽堂發行

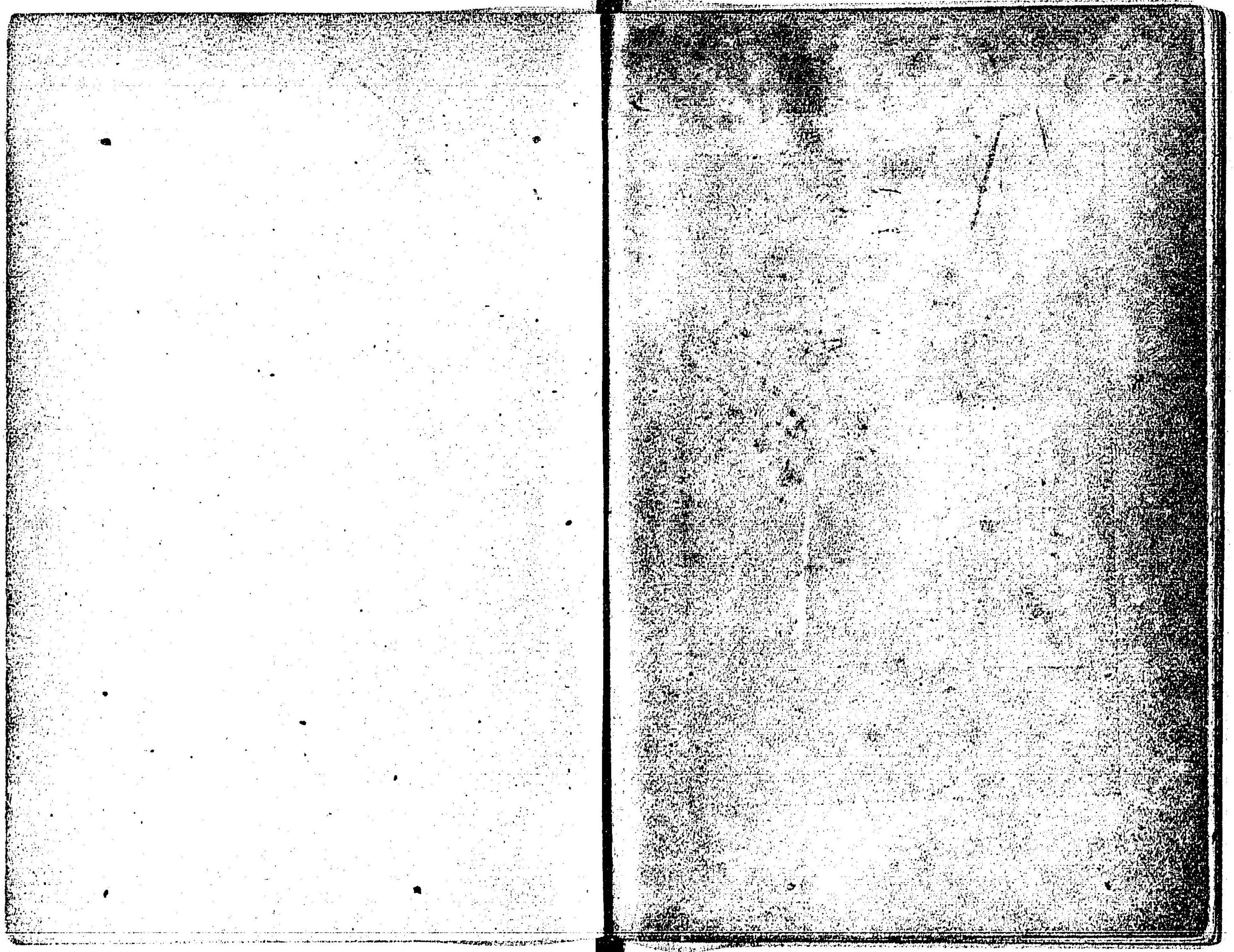
抱月、宙外
 青々園
 合著

風雲集

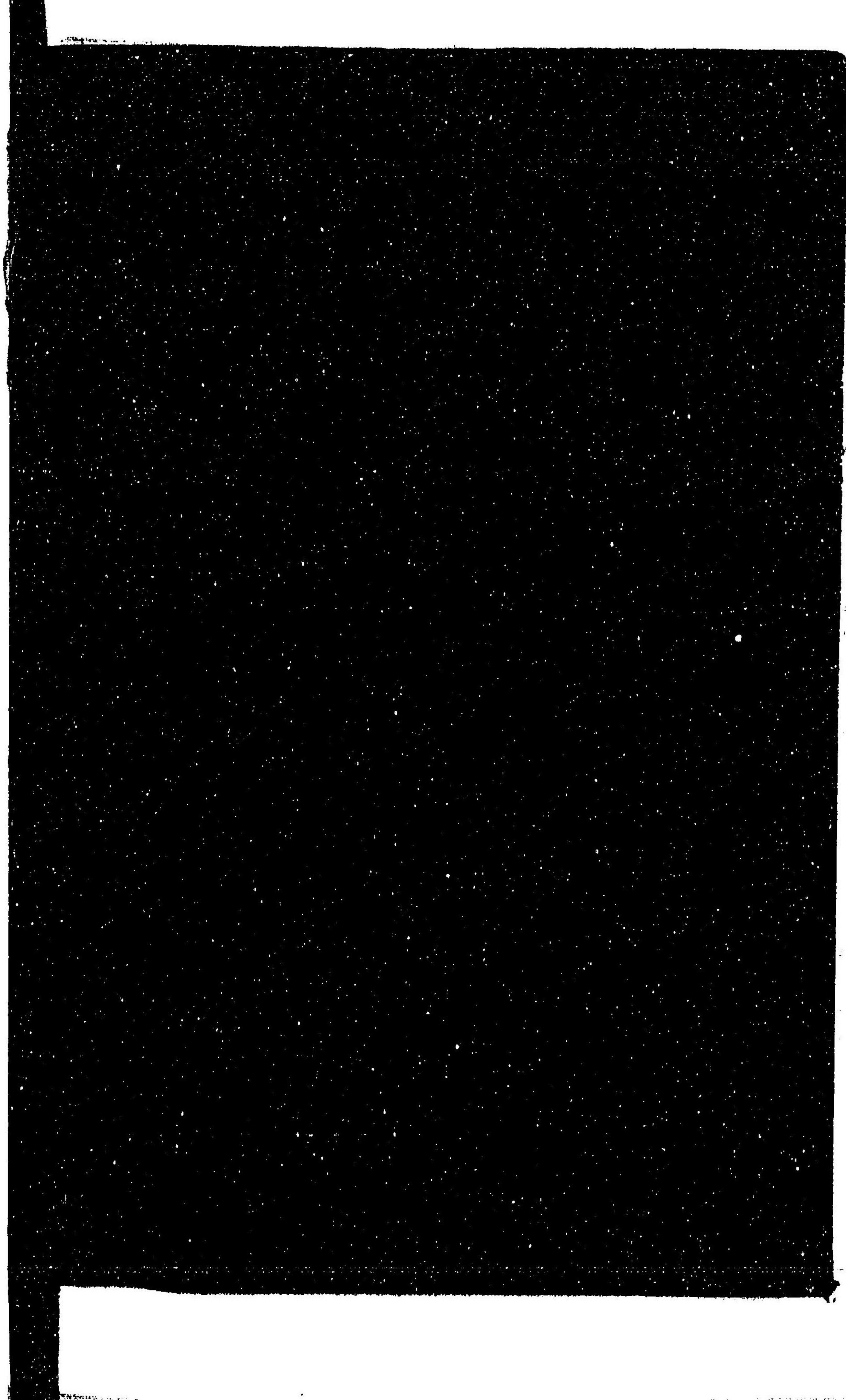
60.SEN

雄風集て風雲を生ず白
 雲散して風雲集る抱月
 氏宙外氏青々園氏の口
 角より生ずる風雲集
 は校めて風雲集にあり





30
439



30
439

M

084769-000-5

30-439

滞欧文談

島村 抱月/著

M39

DBA-0114

